割礼四景

稗田東夷人

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

割礼四景

【Ｎコード】

Ｎ７７３３Ａ

【作者名】

稗田東夷人

【あらすじ】

北アフリカなどの一部地域で今だに続いている「女子割礼」が日本にも広まってしまった世界が舞台です。過酷な通過儀礼を課せられる可哀想な女の子の話が状況と視点を変えて四話です。

第一話（前書き）

２０ＸＸ年、青少年健全育成法（通称、割礼法）が国会を通過した。もとより、躾の厳しい一部の家庭で行われてきた女子の性器切除が全国的に奨励されるようになり、青少年の不純性交遊やオナニーを予防する目的で、中学卒業後に女子は全員、健康診断を受けた上で割礼を受けることが事実上義務付けられたのだ。

どの程度の割礼を行うかは進学先の高校などの校則にもよるのだが、多くの高等学校や企業ではクリトリスの先端あるいは全部と小陰唇の切除が義務付けられるようになった。なを、この処置にかかる費用は全額が公庫から支出されるが、麻酔に関してはこの対象とならない。費用を全額自己負担すれば麻酔した上での処置を受けられるが費用負担の公平を考え多くの高校ではこれを校則で禁止し、学校が選定した病院で集団で処置を受けることを義務づけている。

第一話

病院の廊下に揃いの白いセーラー服を着た集団が、壁際に設えられたベンチに腰掛けて並ばされていた。襟元の校章は県内でも有数の進学校のものである。比較的リベラルな共学の公立校で服装などはさほどやかましく校則で縛らないのだが、入学試験が難関だけにまじめな生徒が多く、染髪や化粧などをする女子生徒はほとんど見られない。その白いセーラー服に発育途上のほっそりとした体を包んだ可憐な女子生徒たちの表情は皆一様に暗い。新一年生を対象にした割礼が行われているところだった。

明日からは五月の大型連休というのに処置室の前の廊下で割礼の順番待ちをさせられている敏子の心は一向に晴れない。前日に校内の大講堂に一年生の女子を集めて行われた説明会で壇上の保険医が言うには、クリトリスの先端の柔らかい部分のみを切除するのだから比較的軽い手術であるとのことだった。自慰を楽しむような悪い習慣と決別できると同時にの性感も残るため将来、家庭内での性生活において酷い性交痛に悩むこともないとのことだった。クリトリスを根元から抉り取り小陰唇もすべて切除するなど他校の例も聞かされ敏子は自分の股間が痛みだす思いだった。だからリベラルな校風の下で学ぶ自分たちが恵まれていると自覚し、明日の割礼が滞りなく行われるように協力的に振舞えとの訓示だった。他の同世代の少女と同じように自慰を不順と考え、女性が性的快感を必要以上に感じることをふしだらと教えられている敏子も割礼は必要なものと納得はしている。しかし、自分の体の中でももっとも敏感な部分にメスを入れられる恐怖は別問題であった。十代もやっと半ばの少女である。これから看護婦や医者の目の前にに性器をさらさねばならないのも耐え難い羞恥だった。生徒たちの精神的負担を考え、医者と看護婦、引率の教師まで女性のみとなっているがこれから受ける

苦痛の恐怖でそんな心遣いに感謝する余裕のある生徒たちはいない。
　学籍番号の若い同級生たちはすでに処置室に入っている。突然に「ぎゃっ！」っと火がついた猫のような悲鳴が処置室の扉を通して廊下に響いた。最初の生徒の割礼がすでに始まっていたのだ。敏子の並んでいる列に動揺が走り、小声でささやきあう声がざわざわとわいた。引率の女教師が険しい顔で睨んだので廊下はすぐに静寂を取り戻したが、少女たちの恐怖感はいやおうなく掻き立てられた。悲鳴は一度切りではなく様々な少女の苦痛の声が断続的に聞こえた。その度に少女の何人かがびくりと体を硬直させた。もうしばらくすれば自分も同じことをされるのである。
　処置室の扉が少し開き、看護婦が顔を出すたびに一人づつ生徒が扉の向こうに入っていく。相変わらず恐ろしい悲鳴は敏子のところにまで聞こえていた。セーラー服の中で冷たい汗が背中を濡らしている。また、扉が開いたが出てきたのは看護婦ではなく敏子と同じ制服を着た少女だった。青ざめた顔で敏子のたちの前を手すりに寄りかかるようによろよろと歩いていく。前髪をピンで留めた額に玉のような汗がびっしりと浮かび、目は真っ赤の充血していた。小さいとはいえ傷口は数日間は痛むのである。敏子は自分の股間までが痛むのを感じ、思わず両太股を強く閉じた。
　大型連休を前に割礼の日程を組むのは授業に差し支えるほどの苦痛だからだった。
割礼が事実上の義務となっている時代にあって、要する費用は青少年育成に有用な方法との観点から公費でまかなわれる。ところが、その公費負担に麻酔代が含まれないのである。麻酔代を自己負担すれば原則的にもう少し人間的な処置が受けられるのだが、ほとんどの高校は校則で割礼を義務化すると同時に各人が個別に麻酔代を自己負担して割礼を受けることを禁止している。費用負担の公平が表向きの名目であるが、割礼の苦痛自体を必要な通過儀礼と考える者が主に保守的な旧世代に多いのである。
　敏子の前を割礼を終えた少女が一人また一人とよろめきながら通

っていく。心身ともに受けた酷い痛手から立ち直れずに看護婦に支えられてようやく歩いている者もいた。出血が落ち着くまで二時間ほどは病室で安静にするのである。敏子の前に並ぶ少女たちの列が次第に短くなり、ついに敏子が先頭になった。すぐ隣の処置室の扉があり、クラスメイトたちの悲鳴がはっきりと聞こえた。耳を塞ぎたい敏子であったが引率の教師の目を意識して身を強張らせながらも恐怖に耐えた。気の強い敏子ではなかったが、皆が耐えている通過儀礼で自分一人が取り乱すのは躊躇われた。
「もうすぐ呼ばれるわよ。えーと、だれだっけ・・・。」
敏子に引率の女教師が声をかけた。敏子ののクラスで英語を担当しているのだが、入学からまだ一ヶ月で生徒全員の名前を覚え切れていないらしかった。女教師髪を後で縛る動作を二回ほど繰り返した。
「はい、すみません。」
敏子ははっとして手首から髪を縛るゴムをはずし、肩まである黒髪でポニーテールを作った。恐怖で忘れていたが、処置室に入る前に髪を縛ってまとめておくように言われていたのである。敏子が冷や汗で頬に貼りついた髪を後に掻いて後頭部の高い位置でしっかり縛ったのと同時にすぐ脇の扉が開き、看護婦が顔を出した。
「次の人どうぞ。」
若い看護婦は事務的に敏子を招きいれた。処置室の中では五人ほどの生徒が上半身だけの手術着に着替えさせられ順番を待っていた。その列の先に敏子から見れば横向きに生徒が診察台に乗せられて割礼を受けようとしていた。産婦人科で使うものと同じ診察台に両足を固定されて少女が乗り、足の間に女医が何かの処置を施していた。少女の両腕は看護婦が頭の上で押さえている。女医が細い鋏をトレーの上から取り上げたのを見て敏子は心臓が止まる思いだった。
「キィイイイ!」
金切り声と同時に台の上で少女の体が弓なりになった。間髪入れず消毒らしい処置が行われ少女が再び悲鳴を上げた。廊下にも悲鳴は聞こえていたが、現実を目の前にして敏子の膝は振るえ、口は乾い

た。
「はい、これに着替えて下さいね。学籍番号が書いた篭がありますので、でそこに脱いだものは入れておいてください。」
敏子を呼び入れた看護婦が緑色の手術着を渡しながら言った。壁際には確かに棚があり番号をふった篭が並んでいる。同性ばかりだからということなのだろうか、処置室内に仕切りの類は一切ない。敏子は着替えにかかる前にもう一度、ちらっと先ほど割礼を終えた少女の方を見た。少女は両手を押さえつけていた看護婦に支えられて台から降りるところだった。手術の助手を務める看護婦は女医と同様に緑の術着に帽子ですっぽりと髪を覆っていた。マスクもしているので敏子の位置からは表情や顔立ちは分からない。敏子に手術着を渡した看護婦が手術台から降りた少女に肩を貸し、奥の別室に連れて行った。残った女医と看護婦は血のついた手袋を交換したり、次の手術に使う器具を準備するなどせわしなく動いている。敏子は棚の前で制服を脱ぎ始めた。手術着の他は何も身につけてはならない。セーラー服とスカートを丁寧にたたんで篭に収めると靴下とブラジャーをはずしてその下の隠した。手術着は他の同級生たちが着せられているのと同じで前をあわせて紐でとめるようになっていて、丈は腹までしか覆わない。最後に敏子は純綿の白いショーツを脱ぎたたんだスカートのポケットに入れた。ここを出るときは履いてはいないのである。短い手術着はむしろむき出しになった部分を敏子に意識させせらた。両手で下腹部を隠して振り返ろうとした瞬間、再び処置室内に悲鳴が響いた。いよいよ恐怖の瞬間が近づいている敏子にとっては内臓が縮み上がる思いだった。震える膝を叱咤して、敏子は小股で列に加わった。敏子の隣に先ほどの若い看護婦がやってきて名前と学籍番号を確認して先に提出した問診表と照らし合わせた。
「看護婦さん、あの、おしっこが・・・。」失禁防止のために順番待ちの間にトイレは済ませておいたのだが、敏子の膀胱は恐怖で縮み上がっていいた。よくある事らしく看護婦は嫌な顔をすることなく

敏子の手をとってさっき入ってきた扉のほうに歩き出した。まさかこの格好のままで廊下に連れ出されるかと敏子はあせった。看護婦は入り口近くにあるもう一つの扉を開いた。中は洋式便器がすえられたトイレであった。ただし側面の壁に窓が切られて尿サンプルを受け取るようになっていた。看護婦は敏子にここで小用を済ませるように言うとせわしなく仕事に戻っていった。敏子が後ろ手に扉を閉めるとドアの向こうで再び悲鳴があがった。

敏子はショーツを下げようとして、自分が下半身に何も身に着けていないことを思い出しそのまま便器に腰をかけた。少しいきむと暖かい小水が股間を濡らしたがすぐに止まった。用は済んでも敏子はすぐに処置室に戻る気がしなかった。ふと、尿サンプルの受け渡し口が開いているのに気がつき中を覗き込んでみると割礼を終えたばかりの少女たちが並べられたソファーの上でぐったりとしていた。

普段はサンプルの整理に使う部屋を転用しているらしい。例の若い看護婦が学籍番号の入った脱衣篭を持って、間を回り手術着から元の制服に着替えさせていた。向こうは気づいていないが、敏子の目の前にまだ手術着のままの少女がいて精根尽き果てた様子で脚を前に投げ出していた。人目を気にする気力もない様子で性器に貼り付けられたガーゼが見えていた。そのガーゼに血が滲んでいるのを見たとき敏子の全身に鳥肌が立った。あわてて視線そらしたがすでに遅く、膝が震えて背中を冷たい汗が伝った。扉の向こうからは時折、同級生たちが割礼を受ける悲鳴が聞こえた。

（このまま逃げ出してしまおうか・・・。）

つい、考えてしまった敏子であったがすぐにその不穏な思考を打ち消した。割礼を受けなかった場合の就職や結婚での不利益は耳にたこができるほど聞かされていた。官公庁ならともかく、民間企業に就職しようと思えばこの学校のようにクリトリスの先端だけを切る割礼は認められず、さらに小陰唇の切除も求められるはずだった。割礼拒否は大学進学においても不利に働くのである。

「割礼を受けないで生きられるところってないかしら・・・。」

敏子はこの病院に来るまでの道程で見た黄色いシャツの集団を思い出した。胸に赤くハートを染め抜いて盛んにシュプレヒコールを送っていたのは割礼に反対する団体の面々であった。黄色にハートを染め抜いたシャツは割礼を受けていない女性が意思表示として着るのである。敏子はため息とともに非現実的な想像を打ち消した。普通の高校一年生である敏子に割礼反対の信念はない。むしろ、漠然と割礼は必要な通過儀礼と考えている。敏子たちにこの通過儀礼を強いる親の世代は割礼を受けてはいないが、現在とは比較にならないほどの受験戦争があり、若者はずっと抑圧され存在であったとも聞かされていた。苦労話を得意げに聞かされるのには反発を覚えたが、反論するだけの信念は持ち合わせていなかった。
「まだですかー？そろそろですよ。」
扉をノックしながら看護婦が呼ぶ声が聞こえた。あわてて立ち上がった敏子はまだ自分の股間が濡れているのに気がついて慌ててペーパーを手繰った。ステンレス製のペーパーホルダーががらがらと大きな音を立てた。
「は、はい！今行きます。」
敏子の声が裏返っていた。大急ぎで股間をぬぐうと水を流しトイレを出ると前の少女が台から降ろされ、次は敏子の番になっていた。緑色の服と帽子とマスクで全身を固めた女医と看護婦は手袋を交換したり血のついた使用済みの器具を片付けたりと忙しく動いている。両手で下腹部を隠した敏子は膝が震えて思うように足が前に出なかった。若い看護婦に背中を押されよたよたと台の前に立ったときには準備がすっかり整っていた。敏子は震える脚を心で叱咤して、台の這い上がった。看護婦が慣れた手つき敏子の両脚を太いベルトで固定した。同姓とはいえ明るい室内で股を開いて性器を晒すのは全身の血が顔面に集まるような羞恥であった。脚を固定し終えた看護婦がちらと敏子の顔を覗き込んで、心配ないとでも言うようにぽんと肩を叩いた。帽子と大きなマスクの間から見える顔は目じりに皺があり、どうやら年配でベテランの看護婦のようだった。

「よろしくお願いします・・・。」
敏子は耳まで真っ赤になった顔を背けながら小声で言った。本来は台に上がる前にそう挨拶するように事前の説明会で言われていたのだが、恐怖と緊張ですっかり忘れていたのだった。問診表の確認をしている女医には聞こえなかったようだが、看護婦は目で頷いた。看護婦はジェルを敏子の恥丘にたらし、薄手のゴム手袋をした手のひらで塗り広げた。冷たい感触に腹の上で堅く拳をにぎって恐怖に耐えていた敏子の体がぴくりと緊張した。ハンドタオルで手袋ごと手をぬぐうと、丁字の安全剃刀を手に取った看護婦は、それを慎重に敏子の股間に当てた。恥丘の皮膚をぐっと引っ張って、ゆっくり剃刀を引くと柔らかな陰毛がするすると剃り落とされた。高校一年生になったばかりの少女の陰毛は地肌が見える程度の薄いもので数回剃刀が往復しただけですっかり無くなってしまった。看護婦は大陰唇の内側や肛門の周囲に毛が無いか慎重に調べた。尻の肉を手で広げられて肛門を見られたり、大陰唇をめくられて内側を指でなぞられたりと、いくら同性とはいえ恥ずかしさで敏子の目じりに涙がたまった。陰毛のない敏子の股間はほんのりと色素が沈着しただけでまだ桃色を維持した清楚なものであった。自慰の習慣はないので日ごろ意識することは少ないが、前日の入浴で丁寧に洗っておいたので恥垢などを発見されて恥をかく心配だけはなかった。細菌感染のリスクを下げるのと、割礼の後に傷口にガーゼをテープで貼るた剃毛は必要なのである。女医がピンセットを手に取り、消毒薬のしみたガーゼを容器からつまみ出した。敏子の割礼に必要な器具は一つのトレーにまとめられていて、女医の隣にワゴンに並べられている。ワゴンの棚には同様のトレーが収められて、敏子の後から割礼を受ける生徒のために準備されていた。膨大な数の少女が割礼を受けるのであるから当然のことだが、予防接種がそうであるように工場の生産ラインのように病院の対応も一切が合理的にマニュアル化されてる。女医が目で合図すると看護婦は敏子の頭の方に周り、両手をとって頭の上でしっかりと押さえつけた。小柄な看護婦だが

敏子が驚くくらい力は強かった。消毒薬に濡れたガーゼが敏子の股間を這った。剃られて肌に張り付いた陰毛を拭いながら女医は肛門の周りまで消毒薬で拭いた。新しい消毒用のガーゼをとった女医は今度は敏子のクリトリスを強く擦りはじめた。少し痛みを伴う乱暴な処置の意味はすぐに分かった。敏子のクリトリスが意思とは無関係に充血しわずかに勃起したのだった。女医はガーゼを捨てると熟練者らしくピンセットを包皮に中に潜り込ませ少女の体の中でもっとも敏感な部分であるクリトリスの先端をつまんだ。柔らかなクリトリスの先端を金属の器具でつままれて、鋭い痛みが走り、敏子の白い太股が痙攣した。両手は頭の上で看護婦ががっちりと押さえていた動かせない。思わず痛みを訴えて叫びそうになった敏子は腹に力を込めて歯を食いしばった。敏子の目はかっと見開かれて自分の股間を処置する女医に向けられている。次に何をされるかという恐怖で目を閉じることができないでいるのだった。女医がクリトリスをつまんだままピンセットを左手に持ちかえた。小さな金属音がして女医は細いはさみを右手にとった。ピンセットが引っ張られクリトリスの先端が包皮の外に出た。

「ヒィイイ・・。」

痛みといよいよ迫ってくる刃物の恐怖で敏子の喉奥から乾いた悲鳴が小さくあがった。台の上で敏子の背中が反って少し浮き上がっている。はさみがクリトリスに触れた瞬間、敏子は顔をそむけて目を強く閉じた。同時に衝撃的な熱さを伴う痛みが股間から背骨を駆け上がってきた。

「ギャアアアア！」

歯を食いしばって悲鳴をあげまいと努力していた敏子であったが所詮は無駄な努力だった。少女が耐え切れる痛みではないのである。台の上で敏子は背中が弓なりにして激しく上半身を左右に揺らした。両脚を拘束している器具はぎしぎしときしんだ。両手を押さえている看護婦は体重をかけてさらにしっかり両手に体重をかけた。うっかり手を振りほどかれてしまうと余計な怪我の元なのである。敏子

の鼻腔にすっぱいものが充満し涙が次々にあふれた。ほんの数秒のことだったが敏子にとっては延々と痛みでのたうちまわって力尽きたようなものだった。激しく暴れるのをやめたとき、敏子は全身の筋肉が硬直し気管が狭くなったような息苦しさを覚えた。気管がヒューヒューと乾いた音を立てて意識が朦朧とした。
「ギャ！」
そんな敏子に女医は割礼後の消毒を施した。恐ろしくしみる薬品で傷口を拭かれて敏子の薄れかけた意識が無理やり引き戻されて、おそろい悲鳴があがった。敏子の次で順番待ちをしている少女は両手で顔を覆って泣き出してしまったが敏子にそれを思いやる余裕などない。熟練した女医の手でガーゼが先端を失ったクリトリスにあてがわれてテープでとめられた。
「終わりましたよ。」看護婦が両足の拘束をときながら言ったが、全身の筋肉が強張ってしまっている敏子はすぐには動けなかった。看護婦は敏子の両脚を台からはずし、背中に手を回して体を起こしてくれた。脚を閉じると傷口に新たな痛みがはしり、思わずしかめた敏子の顔は涙と鼻水で濡れて、額には汗の珠が浮いている。雑用を担当している例の若い看護婦に支えられて台から降りた敏子は奥の別室に向かった。一歩歩くごとに酷い痛みが走って息が止まる思いだった。若い看護婦は敏子をせかすことなく肩につかまらせてゆっくりと歩かせた。敏子の後ろで少女が嗚咽する声が聞こえた。順番待ちの間に恐怖ですすり泣いていた少女である。とうとう自分の番がまわってきて声を上げて泣き出してしまったようだった。
「いやだぁ・・・。怖いよう。」
「大丈夫です、すぐ終わります。」
幼児のようにぐずる声と助手の看護婦のなだめる声が聞こえて、振り返りこそしなかったが敏子は胸が痛んだ。まったく大丈夫とはいえない痛みなのはついさっき割礼を終えたばかりの敏子にはよく分かっていた。ドアの向こうは先刻のトイレでつい覗いてしまった部屋であった。四人がけのソファーが並べられ割礼を終えた少女たち

が二人づつぐったりと肘掛に寄りかかっていた。敏子が座らされたソファーの隣の少女はまだ汗に濡れた手術着を着たままで肘掛に突っ伏していた。敏子が隣に来ても身を起こそうとさえしなかった。看護婦が去ると敏子も同じように肘掛に寄りかかり静かにこの痛みが早く去ってくれることを願った。出血がある程度収まるまではここで安静にすることになっていた。近くで何か人があわただしく動く音がして激しく吐瀉する音が室内に響いた。朝食はとらないように指示されてたのだが、割礼への不安がストレスになり、おそらく前日に食べたものがろくに消化されなかったのであろう。酷い緊張の後で痛みもあって敏子も胃を締め付けられたように苦しい。すっぱい吐瀉物の匂いがただよい敏子は胃液がこみ上げるのを感じた。

若い看護婦に着替えを手伝ってもらい、来たときの制服姿で処置室を出たときにはすでに同級生たちの姿はなかった。ブレザー型の制服に身を包んだ別の学校の女子生徒たちがすでに廊下に詰めていて、青白い顔でよろよろと出てきた敏子を不安そうな目で追った。待合室で他の同級生たちが処置室から来るのを待っていれば、病院が用意した送迎用のバンで各自の自宅まで送ってもらえることになっていた。執刀した医師と県教委の印が入った割礼証明書が敏子宅に郵送されるのは数日後のことである。

第二話前編（前書き）

イザナミノミコトは天地開闢において神世七代の最後にイザナギノミコトとともに生まれた。国産み・神産みにおいてイザナギノミコトとの間に日本国土を形づくる多数の子を設ける。その中には淡路島隠岐島からはじめやがて日本列島を生み、更に山・海など森羅万象の神々を生んだ。火の神カグツチを産んだために陰部に火傷を負って病に臥せった。その際にも尿や糞や吐瀉物から神々を生み、命を落として黄泉の国へ下った。

第二話前編

　両親と家族三人の夕食の席で恵子はおずおずと切り出してみた。中学校二年生の思春期の少女であるから、親子の会話は世間の例に漏れずあまりない。こうして恵子の方から話しかけるのは珍しいことだった。

「ねえ、どうしてもアレを受けなきゃだめ？」

上目遣いで母を見上げながら深刻そうに恵子は言った。

「アレって？」

話しかけられた母親は恵子の深刻さなどどこ吹く風で聞き返してきた。

「アレよ！アレ！」

母の無神経さに恵子は思わず声を荒げてしまった。母はようやく恵子の言わんとしてることを理解したようだ。父はいつものように野球中継を見ながら味噌汁をすすっている。水田の上を通ってきた夜風が網戸を通って、蚊取り線香の煙を揺らしていた。八時を回ったばかりだがこの寒村の夜は静かである。

「いけません！何度も言わせないの。」

母の態度は断固としていた。期待はしていなかったがこう冷淡にに却下されては恵子としてはつい恨めしい心情にならざるを得ない。恵子のいうアレとは二週間ほど後に迫った夏祭りでの儀式のことである。恐ろしいことに大人への通過儀礼として、クリトリスに灸を据えるというものだった。割礼法と通称される法律が施行されて数年、全国の少女たちは性器切除の処置を受けることが事実上義務付けられている。一般に割礼と呼ばれているこの処置を義務付けていない高校は全国でわずかに二校、誰でも名前くらいは聞いたことのある有名な進学校であった。企業にいたっては風俗産業を除けば絶無であると言ってよかった。割礼法には伝統条項なる一節があり、

病院での処置に代わる伝統的な通過儀礼が存在する地域では、この価値を認め奨励するとされていた。いずれにせよ高校に進学すれば割礼は受けねばならず、それなら受験勉強が本格化する前の二年生のうちに済ませてしまおうと言う両親の考えで、この夏休み中に行われる祭の日に恵子のクリトリスは炙で焼かれることになってしまった。

「ねぇ・・・。やっぱりだめ？」

諦めきれずに恵子は父のほうを上目でじっと見た。その視線に気がついた父がようやくテレビから視線を放した。

「高校に行けばどっちにしろ割礼を受けるんだぞ。義務教育みたいなもんだ、みんな進学するんだぞ。であればだな、伝統を重んじてだな、アレをやってもらえばいいことじゃないか。だいたい近所の手前・・・・。」

恵子は父にすがったことを後悔した。この村役場勤めの父ならありきたりの社会通念をしたり顔で説教して見せるだけと最初から分かっていたはずだった。母はそんな父を軽んじる態度を隠そうとはしなかったが、父の言うことに逆らって自分の考えを通した場面を恵子は見たことがなかった。結局は似たもの夫婦なのだと最近の敏子は結論づけている。

「もういいわ、宿題が残ってるから。」

父の長いばかりで無意味な説教を途中で打ち切って恵子は自室に引き上げた。中学生になってから、物置になっていた四畳半のがらくたを処分し、勉強部屋兼寝室としてあてがわれたものだった。畳敷きの和室であるから入り口は襖で鍵はついていないので、両親は決していい顔をしないことではあったが、敏子は内側からつっかえ棒をして使っている。田舎では普通のことだが、夏場は早い時間に風呂を済ませてしまうので恵子はすでにパジャマである。くつろいだ服ではあったが年頃の娘らしく家族がいる前ではパジャマでもブラジャーを必ずつけていた。部屋に入るなりパジャマ上着を脱ぎブラジャーをはずした。胸の締め付けが無くなって恵子はほっと息をつ

いた。つい半年前に買ったブラジャーがもうきつくなっていたのである。白いおとなしいデザインのブラジャーではあったが中高生に人気のブランドである。母に任せておけば自分の財布は傷まないのだが、買ってくるブラジャーといえばバーゲン品のスポーツタイプばかりで、やむなく小遣いの中から小さくない金額を裂いたのである。そういうわけで捨てるに捨てられずこうして少々窮屈なのを我慢している次第だった。恵子はパジャマのシャツを羽織り、前のボタンを閉めもしないで夕方のうちに敷いておいた布団の上に大の字に身を投げ出した。宿題をやるとは言ったもののとてもそんな気にはなれなかった。

（まあいいか。明日、陽子ちゃんに写させてもらおう。）

勉強の良くできる同級生を当てにして恵子はさぼりを決め込むことにした。恵子は自分がまだ歯を磨いていないことに気がついたが、今からもう一度両親と顔をあわせるのも気まずかった。過疎地であるから恵子の学校の生徒数は極端に少ない。小中学校は一つの木造平屋の校舎に納まっていて、中学の三学年が同じ教室で学んでいた。三学年あわせても十人に満たないのである。恵子の同学年で女子といえば恵子が宿題を移させてもらうと決め込んでいる陽子一人であった。天井からつられた蛍光灯の光の下で、恵子の愛らしい胸のふくらみが呼吸に合わせて上下していた。発育途上の乳房はまだ円錐形で陥没した小ぶりな乳首が乗っている。恵子の顔の近くで蚊が飛ぶ音がした。うっとうしい羽音に恵子は暑苦しさを覚えて起き上がりようやく部屋のサッシを開けた。網戸を通して湿ってはいるが冷たい夜が入り前を開けっ放しにしている恵子のパジャマが風をはらんだ。恵子は蚊取り線香の火皿の残っていた灰を庭にあけて、新たに点火して網戸のそばに置いた。ゆらゆらと細い煙が上がるのを確認してから恵子はパジャマのボタンを上から二つ残して留め、明かりを落とした。風邪を引かないように腹の上にだけはタオルケットをかけて横になったものの恵子は寝付ける心境になかった。夜はまだ浅くクーラーのない部屋は寝苦しいのだが何より恵子の胸中を不

安で満たしているのは例の通過儀礼である。半月後には自分のクリトリスが焼かれるのである。鉄砲灸と呼ばれるような大粒の灸で焼かれた箇所には大きなやけどの跡が残り、膿が出る。火傷がケロイド状の跡を残して完治するころにはクリトリスのような小さな突起などは膿とともに消えてしまっているのが普通だった。不安から逃れるためには眠ってしまうに限るのだが恵子の希望に反して睡魔はやってこなかった。恵子は腹にかけてあったタオルケットを広げて頭から全身にすっぽりと被せた。湿気を含んで自分の体臭の染み付いたタオルケットの中でパジャマのパンツをショーツごと膝まで下ろし上着の裾をまくって発育途上の乳房を出した。寝酒をする年齢までにはまだ間がある恵子にとって寝付けないときの一番の解決法はオナニーである。学校の保健体育でははっきり有害な行為と教えられ、家では口に出すことさえ憚られることではあったが、いつの間にか身についてしまったこの習慣を恵子は止めることができないでいた。性器に触れるとなんとなく快感があることにはずいぶん幼いころから気がついていた。何度かショーツの中に手を入れているのを母に見つかり、酷く叱られたことがある。一度は父に告げ口をされ竹の物差しで腿を真っ赤に腫れるまで打たれる折檻まで受けた。親に隠れて続けてきたその行為で愛液が滲み、オルガスムスを感じるようになったのはいつからかは恵子は忘れてしまっている。右半身を下にして横になり軽く体を丸めてリラックスできる姿勢をとると恵子は右手でそっと股間に触れ、柔らかい毛が少々生え始めたばかりの恥丘をやわやわと揉んだ。そうして気分を盛り上げながら恵子は目を閉じて卑猥な想像をめぐらせるのだった。最近、恵子はクンニリングスという行為の存在を知った。男が女の股間を舐めるという。肛門まで丸見えになるように脚を開いて排泄器官を舐めさせるのだと想像するだけで顔に血が上った。そんな恵子がオナニーの時にクンニリングスを受ける自分の姿を想像すると酷く興奮できることに気がつくのに時間はかからなかった。恵子の脳裏に大きく脚を開かされて、クンニリングスを受けて身もだえする自分の姿が浮か

んだ。相手は誰と言えない。贔屓の俳優などを元にして想像で作り出した美男子の漠然としたイメージである。自分の股間がむき出しにされ、それを男が舐め回している想像を膨らませながら恵子は恥丘をこね回していた右手を股間に差し入れ、性器全体をさわさわと擦った。恵子の鼻の頭に汗が浮き、大陰唇の隙間からほんの少量の愛液が滲んだ。オナニーを覚えたとはいえ、まだ男性経験のない恵子は自分の股間を性交の為よりは排泄のための器官と意識している。不衛生と思っている器官を舐めまわされ、匂いを嗅がれることを想像しただけで恵子はかっと顔が熱くなるのを感じてた。ようやく量を増してきた愛駅を恵子は人差し指ですくい、クリトリスに擦り付けた。勃起しても包皮にほとんど包まれたままのクリトリスであるから、指が触れるのはほんの先端だけである。しかしその先端は敏感で愛液の滑りがないと指紋のざらつきでさえ刺激が強すぎるのである。人差し指でクリトリスをこね回し始めると恵子の呼吸が荒くなりはじめた。背筋を駆け上がってくるぞわぞわとした感覚に恵子は空いていた左手で乳房を握った。さして力を入れたわけでもないのに成長途上の乳房に痛みが走った。少々の痛みは今の恵子のとってはむしろ心地よかった。乳房を握る力の強弱をつけながら恵子はなおもクリトリスをこね回す。横向きに寝た体がぴくぴくと痙攣し絶頂が近づいていた。声が漏れて両親に聞こえることを警戒して恵子は頭からかぶったタオルケットを強く噛んだ。人に隠れていかがわしい行為をしていることに罪悪感はあった。恵子はふとこの習慣ともあと半月で決別するのだと思い出してしまった。この敏感なクリトリスに灸を据えられるのだと思うと、恵子の胸中がざわざわと不安で満たされた。恵子は嫌な想像を脳裏から追い払おうとオナニーに集中しようとした。恵子の呼吸が小刻みになり、汗が吹き出たがいったん湧きあがった不安は消えてくれはしなかった。それでも恵子の身体は胸中を満たす感情とは無関係に絶頂を迎えようとしていた。タオルケットの下で恵子の身体がぎゅっと丸まってタオルケットを噛み締めた歯の間から小さくうめく様な声が漏れた。丸まっ

て硬直していた恵子の体からふっと力が抜けた。愛液で濡れた股間を拭うのさえ面倒になって、ショーツとパジャマを戻すとタオルケットをはね除けて、恵子はごろりと仰向けになった。汗ばんだ身体に夜風が涼しかった。仰向けになった恵子のまださほど大きくない胸のふくらみが未だ整わない呼吸にあわせて上下していた。愛液にぬれていた右手はいつの間にか乾きかかっていた。手を洗いに行って下着も変えようかと思いはしたが、恵子の身体をオナニーの後の疲労感が満たしていた。胸の中はまだざわざわとした不安が残ってはいたが睡魔に襲われた恵子が静かに目を閉じるとやがて意識は薄れ眠りに落ちていった。

青々と稲の葉が茂る水田の間を恵子と同級生の陽子が歩いている。明日からは夏休みというわけでこの日は終業式のみで下校となった。二人は並んで自転車を押しているが、陽子の自転車からからからと金属音がしている。運が悪いことに陽子の通学用の自転車のチェーンが切れてしまったのだ。恵子の自宅は地区のはずれに陽子の家はその通り道にある。陽子は遠慮したのだが一人で置いて行くのも気が引けて、こうして恵子も一緒に自転車を押している次第であった。恵子は伸ばしている途中のを小さな三つ編みにし、陽子は短く刈っている。並んで歩く二人のうなじや背中を照りつける太陽が容赦なく焼いた。恵子は開襟シャツの胸元から自分の蒸れた汗のにおいが立ち上るのが気になっていた。

「これは帰ったら即行水ね。」

陽子が入道雲を一瞬見上げて、この暑さを恨めしそうに言った。

「だいたい、今日のけちの付きはじめはアイツよアイツ！」

大人しい陽子には珍しく人を悪し様に言った。恵子も即座に強く頷いた。アイツと言われているのは小学校の教務主任をしている体育教師のことである。ひげの剃り痕が青々としたその顔を思い出すだけで恵子は腹が立った。生徒数が極端に少ない過疎地なので、恵子の学校では小中学校が同じ建物に入っている。終業式は体育館でやるのだが、もちろん小中学校合同である。

「皆さん、今朝、恵子さんのお母さんから聞いたのですが、恵子さんと陽子さんがこの夏休みにアレを受けます。大人への仲間入りをする重要なことです。皆さんおめでとうと言ってあげて下さい。」
あろうことか全生徒の前で体育教師が暴露してしまったのだ。パラパラと寂しい拍手とぼそぼそと義理で祝福を述べる言葉が上がった。無邪気に拍手しているのは小学一年生の男の子だけで他の男子は悪い事を聞いてしまったと複雑な表情をするか、にやりと口元が笑っているかだった。女子の表情はもっと複雑だった。いずれ自分も同じ通過儀礼を受けねばならないのである。ただ一人経験者であった三年生の女子は気の毒そうな目で二人を見るだけだった。あまりの事態に呆然としていた恵子はパラパラとわきあがった拍手で我に帰った。一番触れられたくないことを全校生徒の前で発表されてしまった。これでこの夏休みに二人がアレを受けることになっていると地区全体に知れ渡ってしまうだろう。そう思うと恵子の顔はかっと熱くなり、恥ずかしさで目に涙が浮かんだ。隣では陽子が耳まで真っ赤になって俯いていた。
「だいたい、セクハラって言葉を知ってんのかしらね。新聞読んでなさそうだけど。」
憤懣遣る瀬無いといった表情で陽子は大きく鼻から息を吐いた。二人の会話は体育教師の悪口ばかりになっていた。
「ところで、陽子もアレを受けるなんて知らなかった。」
例の体育教師への憤懣で一時忘れてはいたが、今の恵子の胸中を占めているのはアレへの恐怖感である。つい話題を向けてしまった。
「ああ、それね。ほら、高校に行くと割礼は義務だし、校則が厳しいとこだとすごい手術になっちゃうから。アレをやっておくと一応伝統に則ってってことだから割礼は免除されるしね。」
陽子がとっさについた嘘をついた。陽子の成績なら校則の緩やかな公立の進学校を選べるのである。クリトリスの先端を少し切り取る割礼で十分なはずだった。それでも痛みは相当なものだが、クリトリスに灸を据えられるよりははるかにましなのである。真相は恵子

の母が陽子の家を訪ねたとき、娘がアレを受けるといってしまったのである。しかも恵子の母は陽子にも受けさせるように強く勧めたのであった。同級生が伝統の通過儀礼を受けるのに自分の娘は受けさせないでは確かに世間体は良くない。狭い村社会で近所の手前もあって陽子の両親は困惑した。決め手になったのは地区の婦人会での集まりでのことだった。婦人会仲間の間では陽子はすでにアレを受けることに決まったことになっていたのである。恵子の母が吹聴したのは明らかだった。もはや既成事実が出来上がってしまっている以上、選択肢は無いとして陽子の両親は娘にクリトリスを灸で焼かれる通過儀礼を断固とした態度で命じたのだった。陽子は恵子の巻き添えになった形である。恵子がこれを知れば負い目を感じるであろうし、あるいは家庭内で両親と衝突することも考えられると陽子は適当な理由をでっち上げたのである。じりじりと二人の背を焼いていた太陽が雲のに隠れた。西の空にあった入道雲が迫ってきて湿った涼しい風が吹いたかと思うと、稲光とともに大粒の雨が一気に落ちてきた。恵子と陽子は自転車を押して家へはしった、豪雨と足元から跳ね上がる飛沫で二人はたちまちずぶ濡れになってしまっていた。雨の中で全力疾走する陽子が押す自転車のチェーンカバーの中で切れたチェーンがガラガラと大きな音を立てた。

第二話後編（前書き）

打膿灸とは大豆大から指頭大の灸を焼ききり、その部位に膏薬を塗って故意に化膿させる。本来は、膿瘍や癰腫に用いられたと考えられる。また化膿することにより白血球数を増加させて免疫力を高める灸法といわれている。大きな灸痕を残すため極一部の灸療所でのみ行われ、多くは家伝灸として伝えられている。

第二話後編

　割礼当日の日、恵子は地区の神社のある小山にいた。社は小山の頂上にあるのだが参道を通るならさして苦になる道のりではない。恵子は胸まである藪を掻き分けてここまでやってきたのである。この日、恵子が例の通過儀礼を受けることは地区中に知れ渡ってしまっていた。思春期の少女らしい羞恥心で途中人に会うのが堪らなく嫌だったのである。山頂の社が見えたとき、恵子の頭上で花火が鳴り、微かにお囃子の音も聞こえる。少しでも立ち止まるとたちまち蚊の大群に襲われるので息を切らしながら恵子は歩いた。恵子は手水場の後ろにやっと到着した。参道を見下ろすと道の両側に出店が立ち、まだ午前中ではあったがいくらかの人出があった。恵子は人に会わないように急いで裏手にある集会場へ向かった。途中、何人かとすれ違いはしたがもちろん挨拶などはしなかった。地区の全員が知り合いというような田舎である。言葉を交わせばアレについて聞かれるに決まっていた。恵子も地区の面々もアレとしか言わないが、無論、正式な名称はある。始まりは国生みの女神が火神を生んだ際に陰を焼き落命に至ったという神話に由来するとされている。祭神や神事の固有名詞をあえて口に出さないのは神道のしきたりではあったが、これから恵子が受けねばならない儀式に関しては厳粛な神事とされてはいても、内容が内容だけに口に出すのが憚られるという理由もあった。裏手にある集会場の入り口にはチェーンが張られ関係者以外立ち入り禁止の札が立っていた。今日一日、アレのために地区の婦人会が借り切っているのである。チェーンをまたいで共同間の裏庭に回ると濡縁に腰掛けたセーラー服姿の陽子がいた。恵子も同じ服装であったが藪の中を掻き分けて歩いてきたために汗まみれでだいぶ汚れていた。脇においてあった蚊取り線香を後ろに押しやりながら、陽子が隣に座るように手招きしてくれたので恵子は

胸元から立ち上ってくる汗のにおいを気にしながら少し間を空けて腰掛けた。何箇所か蚊に刺されてしまった足をかきながら、恵子は陽子になんと声をかけたものか考えた。陽子も無言である。集会場は六畳間の和室が一つあるだけの小さなものである。稽古の背後にある障子の向こうからなにやら忙しなく動き回る音が聞こえた。婦人会の面々が二人のアレを施す準備をしているのである。祭りの喧騒を遠くに聞きながら恵子は点々とかに刺された跡がついた肢を掻いた。膝の裏を掻こうとして恵子ははっと手を止めた。実は下着の類をつけていないのである。この儀式を復活させたのは地区の有志や教師で作る伝統保存会が決めたことだった。神事に臨むのであるから、体に下着の跡などをつけてはならないというのである。これから恵子が受けねばならない儀礼の手順その他も伝統保存会の面々が聞き込みや断片的な資料で半ば想像で作り上げたものであった。民俗学者などは着物の上から下腹部に焙烙を置き、その上から灸をすえたに過ぎずクリトリスを焼け爛れさせるようなものではなかったと言っている。その伝統も江戸時代の半ばにこのあたり一帯を襲った水害と冷夏を境に廃れてしまっていた。だから、恵子たちにこの酷い苦痛を伴う通過儀礼を強いている親の世代はクリトリスを焼かれるような仕打ちは受けていない。割礼法が施行されたとき村の中学に赴任してきたばかりで何か新しいことをやりたかった校長は精力的に活動を開始した。半年もたたないうちに伝統保存会なる組織が出来上がり、最初の一人が灸でクリトリスを焼かれた。学術的な意味で伝統とはおおよそ言いがたいものであったが当時の校長とその周囲の面々は目立つことをやりたかったのである。ましてや、酷い痛みを引き受けるのは自分たちではないのだから彼らの考える儀式は酷く残酷で容赦のないものになってしまった。恵子はそっと横目で見ると、陽子は少し緊張した表情をして膝をきちんとそろえて静かに座っていた。着ているセーラー服は恵子のように汗じみてはいない。恵子と同じように人に会いたくない陽子は人出のない今朝早くに父親に車で送ってもらっていたのだ。それからこの時間ま

でずっと濡縁に座っていたのである。婦人会の面々がやってきて、自分をこれから苦しめる儀式の準備をする様を陽子はずっと見ていたことになる。恵子の後ろで障子が開いた。地区の子供たちからは口うるさいお節介と煙たがられているらっきょう婆が顔を出した。無論、らっきょう婆というのは恵子たちがつけた悪意あるあだ名である。顔は顎が極端に小さいぎょろ目の中年女性でちょうどらっきょうが逆立ちしたように見える。このらっきょう婆は学校の運動会から年末の餅つきまで地区で行煮があるたびにやってきては俄然仕切るのである。子供を見つければ走るな騒ぐなとまるで因縁をつけるように小言を言うのが常だった。

「準備ができたわよ。表に行って水を浴びてらっしゃい。あんた達のために幕で囲っておいたからね。」

らっきょう婆が障子を開けた隙間から首だけ出して言った。恵子も陽子も返事をせず無言で立ち上がって井戸のある集会場の表へ向かった。二人の態度に気を悪くしたらしいらっきょう婆は不機嫌そうな顔で濡縁に出て、蚊取り線香を燃えている手前で折って残りを箱の中に戻した。

「ちょっと、二人とも服着たまま水をかぶるのかい?脱いでいきなさい。下駄はここにおいて置くよ。」

二人の背中に向かってらっきょう婆は言うと障子を閉めて中へ引っ込んでしまった。いつもの態度と変わらず、気を悪くしたの一瞬のことだったらしい。嫌われていることを自覚できない人なのである。二人とも朝食は控えめにし、自宅で大便は済ませてある。途中で漏らした場合のことを考えれば当然だった。失禁したくなければ水をかぶる前にもう一度トイレにも行っておかねばならなかった。校則で非常に過酷な割礼を義務づけている高校などでは執刀前に全員浣腸を施されると恵子は聞いていた。それでも、差し迫った恐怖を前に恵子は自分が置かれている状況が比較的ましな部類と考える心境にはなれなかった。

全裸に下駄をはいただけの二人が表の玄関から集会場に入ると障

子が締め切られた六畳に婦人会の中年女性ががが四人いた。らっきょう姿の隣に自分の母の姿を見つけて恵子は言いようのない気まずさに襲われた。部屋の隅に座っているもう一人の人影が地区で唯一の医院をやっている軍医上がりの老医者とわかって陽子は小さく悲鳴を上げ、恵子はあわてて手で乳房と下腹部を隠した。危険を伴う儀式であるので医師が立ち会うのである。老人とはいえ男である。思春期の少女が思わず動転してしまったのは無理もないことだった。二人の体からは先ほど浴びた井戸水の雫が滴っている。締め切られた室内は暑く割烹着を着込んだ婦人会の面々は大汗をかいていたが、体を清めるとして冷たい井戸水を何度も浴びなければならなかった二人の体はこれから受ける苦痛への恐怖もあって小刻みに震えていた。六畳間のちょうど中央に屏風が置かれその向こうでクリトリスを焼く儀式の準備が整っているはずだった。屏風はあり合わせの物らしく派手な色を使った安っぽい品であった。タオルを受け取って恵子たちが体を拭いながら下駄を脱いで畳にあがるとらっきょう婆が屏風の辱から顔を出して手招きした。恵子は思わず陽子と顔を見合わせた。どちらかが先に行かねばならない。陽子が無言で屏風の向こうに入っていった。気丈な陽子の足取りはしっかりしていたがその表情が恐怖で引きつっているのを恵子ははっきりと見てしまった。素っ裸で過酷な通過儀礼が待つ屏風の向こうに歩いていく陽子の後姿を見送りながら、恵子はタオルを肩に羽織って柱を背にして座った。屏風の向こう側で人がせわしなく動く気配がして陽子のクリトリスを灸で焼く準備が進んでいるようだった。陽子が感じているであろう恐怖を思うと恵子の胸は痛んだ。無論、同情ばかりもしていられないのである。陽子が終われば次は自分の番なのだと思うと恵子は冷たい汗が出るのを禁じ得なかった。屏風で仕切られているとはいえ狭い六畳間であるから向こう側にいる人に息遣いまではっきりと聞こえた。その屏風の向こうが静かになり安物の壁掛け時計がだす秒針の音が聞こえるようになった。恵子は静けさが恐ろしく膝を抱え

てうずくまる姿勢に座りなおした。もぐさの焼ける匂いが恵子の鼻に届くと同時に、陽子のかすれた悲鳴が上がった。
「ひぃ、ひぃ・・・・、熱い！熱い！！もう嫌だ、助けて！もういいでしょ！！」
かすれた喘ぎ声だった陽子の悲鳴はたちまち泣き叫ぶ声に変わった。指頭大の灸が燃え尽きるまで２０分はかかるのだから、陽子の苦痛はまだはじまったばかりであった。
「暴れると怪我をする！しっかり抑えて舌をかまないように！」
老医師が婦人会の面々を叱咤する声が響いた。陽子の悲鳴がくぐもったものに変わった。舌を噛んだり喉を痛めたりしないように何かを口の中に押し込まれたようだった。
「うごぉおお！うごぉおお！！」
獣のような陽子の悲鳴を恵子は両膝の間に顔をうずめて震えながら聞くしかなかった。陽子が据えられている灸は打膿灸と呼ばれる一般の鍼灸院ではまず扱わない代物である。普通よりはるかに大きい指頭大の灸を燃え尽きるまで据えて重度の火傷を負わせ、そこの軟膏を塗りつけて膿を出すのである。主に皮膚にできた悪性の腫瘍を焼くためなどに使われる灸だった。陽子の悲鳴が力尽きたように小さくなってゆきやがて静かになった。自分の番が近づいてきたのだと恵子の緊張はさらに高まった。
「ぎゃぁああ！！！」
口の中の詰め物を外されたらしい陽子のすさまじい叫び声が突然に上がり、恵子は飛び上がってしまった。陽子が恐ろしい痛みを伴う何かをされたということだった。屏風の向こうで再びせわしなく人が動く音がしてどうやら陽子の通過儀礼は終わったようだった。ざわざわと複数の人が動く音に混じって陽子のすすり泣く声が聞こえた。大人しくはあるが気丈な陽子が弱々しくすすり泣く声を聞くなど恵子でさえ聞くのは初めてだった。屏風の裏から出てきた洋子は力尽きたように人の肩にすがって半ば引きずられるように恵子の隣まで運ばれた。肩を貸しているのは恵子の母であった。床に下ろさ

れた陽子はぐったりと横になったまま身を起こそうともせずにすすり泣いていた。恵子は庭の井戸水で体を清めている最中に陽子の裸体を見ていた。脂質に乏しいながら均整がとれて大人びた体に自分が置かれている状況にもかかわらず軽い羨望を覚えた。その体が脂汗にまみれて蒸れた体臭が恵子の鼻にまで届いていた。確かにあったはずの股間の体毛はそり落とされ、クリトリスを中心にガーゼがあてがわれテープで止められていた。

「はい、次。」

泣いている陽子を無視して恵子の母は顎をしゃくりながら言った。実の母から冷たい仕打ちを受けて恵子の目頭に涙がたまった。娘の苦痛や恐怖を母はまるで斟酌していないのである。奥歯がかみ合わないほど恐ろしかったし、陽子も心配であったが恵子もクリトリスを焼かれねばならない。恵子はのろのろと立ち上がると両手で胸と下腹部を隠して屏風の向こう側に歩いた。部屋の隅で監督している老医者の視線が気になって内股で小さく足を動かしたのだが狭い室内のことだからほんの数歩である。屏風の反対側には紙子と呼ばれる和紙の布団がしかれていた。穢れを嫌う神事であるからこれは後で焼き捨てられるのである。灸に使う百草と線香などは既に用意されていた。らっきょう婆にせかされて恵子が紙子の上に仰向けになると紙子は陽子が流した汗でじっとりと濡れていた。恵子にはそれを気味が悪いと思う余裕さえなかった。

「はい、始めるよ。手をどけて、きをつけ！」

恵子の母が体育教師か何かのような口調で命令した。恵子はおずおずと下腹部を隠していた両手を体の両脇に置くしかなかった。恵子が横たわる片側は屏風でその向こうからはまだ陽子のすすり泣く声がしていた。もう片側は障子である。さらに外側はさっきまで恵子たちが並んで座っていた裏手の濡縁である。障子から差し込む光を恵子の恥岡の柔らかでまだ生えそろわない陰毛がきらきらと反射した。恵子の両側にいた二人がいきなり片方ずつの足も持ちぐいと開かせると高く持ち上げた。

「きゃ！」
予め、儀式の手順は知らされていたが股間をむき出しにされて恵子は小さく悲鳴を上げた。恵子の膝の裏側に青竹の棒があてがわれた。
「膝を少し曲げなさい。」
母の声がして恵子はようやく膝の力を抜いた。足を大きく開いた姿勢で恵子の膝は青竹にさらしの布でしっかりと固定されてしまった。仰向けで足を開いたまま高く上げている恵子の姿勢はおむつを交換される幼児と変わらない。恵子は自分の脚の間に母の顔があるのに気がついた。股間を実母にしげしげと観察されて恵子は両手で顔を覆った。目じりからは恐怖と羞恥で早くも涙が流れていた。恵子はもともと体毛が濃い体質ではなく、年齢の若さもあって陰毛は恥岡の中心に少量あるだけで灸で焼かれる部分にはない。剃毛の必要なしと判断した恵子の母は他の三人に向かって頷いた。まず、らっきょう婆が恵子の胸の上に馬乗りになった。両手はらっきょう婆の膝の下でしっかりと体重をかけられて恵子の力ではどうにも動かない。恵子はらっきょう婆の表情がなんとも楽しげなのをしっかり見てしまった。さらに恵子の両膝を固定している青竹の両端が二人掛りで頭のほうに持ち上げられしっかりと体重をかけられた。脚を大きく開いたままで二つ折りにされる姿勢である。息が苦しいつらい姿勢だったが恵子の思考を占めているのはもはや灸の熱に対する恐怖だけだった。校門までむき出しの恵子の股間は天井に向けられている。恵子の性器はまが小陰唇のはみ出しも殆どなく、普段ならぴったりと閉じられた清楚なものであるが、大きく足を開かされている今は大陰唇が左右に割れて膣口や尿道口などが光にさらされていた。恵子の母が百草をひねって恵子の小ぶりなクリトリスに据えた。尿道口を火傷させてしまうと細菌感染など問題が起こりやすいので位置は慎重に決められねばならない。恵子の母が最後に強く押し付けて灸の位置を決めたとき、恵子の白い太ももが痙攣し全身に鳥肌が立った。恵子の脇で点火用の線香が細い煙を上げていたがそれが取り上げられるのを見て恵子は強く目をつぶり奥歯を食いしばった。い

よいよ恐ろしい苦痛を味わう時が来たのである。三角錐の灸の頂点に線香が当てられ小さく赤い火がともった。点火されても恵子にはすぐにはわからない。熱くなるまでには若干の間があるのである。百草のこげる匂いが鼻に届いた瞬間、恵子はクリトリスにほんのりと熱を感じた。ほんの数秒で猛烈な暑さが襲ってきた。

「う・・・。ううっ・・・。」

らっきょう婆の尻の下で恵子はうめき声を上げつつも必死に熱さに耐えた。灸は最初の一分ほどはどんどんと温度を上げていく。うめき声が次第に大きくなりついに恵子は泣き叫んでしまった。

「きゃあああ！痛い！！お母さん！もういやだ！」

強烈な熱さは痛みとの区別がつかない。もちろん恵子の母から救いの手など差し伸べられない。必死で暴れて逃れようとはしても三人がかりでがっちりと組み敷かれてしまってはどうにもならなかった。らっきょう婆が指にさらしの布を巻きつけ団子状のものを作るとそれを恵子の口に押し込んだ。こうでもしないと喉を痛めてしまうのである。自由になる足首から先と頭だけは狂ったように振って恵子は絶叫した。屏風の向こうでは陽子が聞いているはずだったがそんなことに頓着する余裕などあるはずがなかった。灸は最高温度に達すると二分ほどはその熱を維持する。

「うごおお！！ううん、うごおお！」

口に詰め物をされて恵子は泣いて暴れることしかできない。しかし人間の体力には限界がある。ましてや恵子は中学二年生の少女であった。ほんの一分で必死に逃れようと暴れる力も弱まり声も出なくなった。熱さに耐えられているのではなく単に力尽きただけである。点火から三分の燃焼を終えて灸が温度を下げ始めたとき、恵子は目を見開いて声も無く涙を流すだけだった。誰も予想しないことで狭い室内に突然大きな放屁の音が響いた。恵子が漏らしてしまったのである。涙で視界がかすんでしまっている恵子はらっきょう婆が鼻の前を扇ぐしぐさをするのは見なくてすんだが、その場にいた四人がくすくすと忍び笑う声ははっきりと聞いてしまった。恥ずかしさ

と惨めさで恵子の目から新たな涙がどっと溢れた。忍び笑う声には実母の声も混じっているのである。恵子は母に憎しみを持たざるを得なかった。灸は一分ほどかけて温度を下げ燃えかすとなって火は消える。ただちに燃えかすが払われ恵子の両足を縛っていた布も解かれた。唾液で濡れた口の詰め物をやっと吐き出した恵子はだらしなく四肢を投げ出したまま身動きすらできなかった。火傷した股間はまだ燃えるような痛みだった。放心している恵子の焼け爛れたクリトリスに軟膏が塗りつけられた。この軟膏が火傷を化膿させクリトリスを膿に変えてしまうのである。

「ぎゃああああああ！！！」

不意に火傷した部分に軟膏を擦り込まれて強烈な痛みが恵子を襲った。ぐったりと弛緩していた体は意思に反して踏まれた猫のように跳ね上がった。衝撃のような痛みが引くのを恵子は身を硬くして待った。涙が溢れてようやく喉の奥から嗚咽が漏れ始めた。

「人前で泣かない。恥ずかしいでしょ。」

恵子の母の声だった。もちろん恵子もそれはわかっている。しかし、嗚咽は止めよ酔うとする意思に反してますます込み上げてくるのだった。軟膏の上からガーゼがあてがわれテープで止められて儀式は終わった。部屋の隅に控えていた老医師も一度うなずくと席を立った。これから二週間ほどは膿をガーゼに吸わせ続けねばならない。膿を出し切って傷がいえるころにはクリトリスは火傷の跡を残して消えてしまっているはずである。恵子の自宅では娘が通過儀礼を受けるのを祝って親戚一同を招いた祝宴が張られているはずである。陽子も帰宅して一休みしたら恵子は挨拶くらいはせねばならない。陽子も恵子もこの日の晩はかなりの発熱に見舞われるはずである。

第三話前編（前書き）

現実の世界における女性性器切除

ＷＨＯの推計によれば北アフリカを中心に１億３千万人以上のの女性が性器切除を受けている。年間では約２００万人、一日に６０００人という膨大な数である。切除の内容は、スンナ割礼と呼ばれるクリトリスの一部または全部を切除する方法が最も多い。中にはファラオニック割礼と呼ばれる惨いケースもある。クリトリスを抉り取り、小陰唇を切り落とした上、内側を削いだ大陰唇を縫い合わせて癒着させるのである。

このような悲劇的な因習が一日も早く廃され、オナニーのための妄想の世界のみに留め置かれることを願う。

第三話前編

照明を落とした薄暗い部屋に男女荒い息遣いが響いていた。部屋はマットレスの上にタオル地のシーツを敷いた大きなベットにほとんど占領されいる。隣室は浴室で性的なサービスに使うマットや椅子などが備えてある。全裸の男の上にセーラー服を着た女がまたがり盛んに腰を振ってた。言うまでもなく風俗店の一室である。女は文子という。本名だが店のオーナーが気に入りそのまま源氏名としても使っているのだった。文子は短いスカートの下に下着をつけていなかった。スカートの裾をたくし上げヴァギナを客のペニスに強く押し当てては擦った。粘着質の音がするのは無論、愛液で濡れているのではなく、体温で温まったローションのせいである。文子は客へのサービスとして精一杯切なげな喘ぎ声と吐息をもらした。文子はペニスにこすり付けられるクリトリスに意識を集中させ快感を拾い出そうとしていた。相手は客の男で特に愛情を感じる対象ではないが、性器を激しく擦り合わせるうちに文子の下半身むず痒いようなに感覚が走った。この日、すでに四人の客を相手にした文子のヴァギナは申し訳程度に体液を分泌していた。ローションではなく本物の愛液で奉仕するのも営業努力なのである。客の手がセーラー服をたくし上げブラジャーを着けていない胸を露出させた。小ぶりではあったが少女の円錐形の乳房ではない。男の手が両乳房を鷲掴みにすると、文子は体を前に傾けて客がむねを揉みやすいようにしてやった。客の呼吸がいよいよ荒くなり乳房を握る手に血柄が入るようになってきた。風俗嬢としてのルーティンをこなしているに過ぎない文子だったが自分の体で男が身もだえするこの時は嫌いではなかった。

「あの・・・。もういきます。くっ・・口で・・・・・。」

客が喘ぎつつ言った。リクエストがあっては仕方がない。文子は内

心は渋々と、しかし表情と態度には決して表さず馬乗りになっていた客の体か降りた。文子は口での愛撫が嫌いなわけではない。ただ、自分の股間を擦り付けていたペニスを口に含むことに抵抗があるだけである。夫を亡くしてから生活のために始めた風俗嬢だったが、もう四年目のベテランである。ベット脇に備えてあるウェットティッシュでペニスを拭うことも出来るのだが、そういう行為が決して男に受けないことはわきまえていた。文子は客にそっと自分の体を沿わせ、口の中にためた唾液を垂らした。熱い唾液の感触に客のペニスがひくとそれが脈打つのを見てから文子は一気にそれを口にふくんだ。えずかないように角度に注意しながらペニスを根元近くまでくわえ込んで激しく吸いたてつつ強く唇で扱きたてた。舌で亀頭の裏をごしごしと擦ると客の体が硬直し有機的な臭気を放つ精液が文子の口内に吐き出された。文子は勢い良くほとばしる精液が気管に入らないよういったん舌で受けて落ち着いて飲み下した。そのまま、尿道にたまった精液を吸出し亀頭もきれいに舐め清め献身的な奉仕をしているのだとアピールするのも忘れなかった。

「さあ、そろそろ時間ですのでシャワー浴びましょう。」

しばらく荒い息をする客に寄り添って体を優しくなでてやっていた文子が言った。客は十分に満足したらしく延長料金を払ってもう一回戦に及んではくれそうにはなかった。文子に手を引かれて客の男はよろよろと立ち上がった。二人が隣の浴室に入るとすりガラスに、重なって立つ男女のシルエットがうつった。シャワーの水音がしばらく続きやがて止まった。

店からの帰り、地下鉄の駅を出た文子はメインストリート沿いからは外れた一棟のビルに入った。エレベーターの前は素通りして階段を小走りに上がっていった。今日のように何度もシャワーを浴びたあとは体がだるく、こうして少しでも体を動かしておかないと体調が悪いのである。もっとも、そんな心配も今日が最後だった。文子のハンドバックの中には最後の給料が入っている。四人客がついた今日のような日はしばらく無かった。顔立ちはどこと泣く幼さが

あり、よく締まった細身の体型はまったく崩れてはいない文子だったが、２８歳という年齢は風俗嬢としては重くのしかかるハンデであった。ビルの六階は最上階である。その一室の扉にひまわりをデザインしたプレートがかかっている。文子の住む公団住宅の最上階の一部と屋上が託児所になっているのであった。時間は午後九時を回ろうとしていた。文子が呼び鈴を鳴らすと鍵のかかったドアの向こうから娘の声がした。

「ママ！おかえりぃー！！」

一緒に預けられている友達はとっくに家へ帰っている。営業時間終了まで預けられているのは四歳になる愛娘独りだけなのだ。友達が皆帰ったあと、一人でドアの前で迎えが来るのを待つのが娘の日課になっていた。母子家庭の現実を考えれば仕方が無いこととはいえ、娘に寂しい思いをさせていることに文子の心は痛んでいた。

「ただいまー！」

文子は明るく声を返した。もうすぐ文子は昼間の仕事に就くのである。託児所に預けられなければならないのは変らないが、夜遅くまで一人で迎えを待つのはもう少しの辛抱だった。娘は自分でドアのロックを開け文子に飛びついてきた。やや遅れて保母が現れ、連絡帳と今日作った折り紙の作品が入った袋を文子に手渡した。娘を含めて誰も文子の本当の仕事が何であるかを知らない。保母や託児所の友達に、親の仕事を聞かれることもあるはずである。娘の嘘を言わせていることは文子の負い目だった。

娘を連れ自宅のドアを開けても中は真っ暗闇である。それでも、玄関の明かりをつけて娘と二人でただいまを言う事にはしていた。文子はまず居間のサイドボードの上にある亡夫の遺影の前から茶と水を下げた。ついで文子は風呂の蛇口をひねり湯船にぬるめのお湯をはった。まだ四歳の娘は熱い風呂が苦手なのである。娘は託児所で簡単な夕食を済ませてきている。親子で夕飯を取る楽しみもこれからは教えてやれるはずだった。

　風呂上りのパジャマ姿の母子が居間のソファーに並んで座ってい

た。いつもならとっくに娘を寝かしつけている時間であったが文子はじっと物思いにふけっている。数年前、割礼法と通称される法律が施行され、女子の性器切除が事実上義務となった。割礼法よりはるか前から、一部のしつけの厳しい家庭では思春期の娘のクリトリスを切除し自慰を防止することがなされていた。文子の少女時代にその習慣が一気に一般化したのである。当初は性器切除は少女への虐待であると反対する声も強かった。リベラルな文子の両親もその一人で文子の性器は切除を免れたのである。文子の中学時代の同級生の約半数は高校進学直後か進学前に割礼を受けた。割礼を受けていない女子は進学、就職などええ不利益を覚悟せねばならない時代になりつつあったのである。文子はクリトリスの全部と小陰唇を切除する割礼を受けた翌日の友人を見舞ったことがある。仲の良かったその友人は文子が部屋に入ると顔をくしゃくしゃにして泣き出してしまった。友人の受けた恐怖と痛みを思うと、当時、高校生だった文子の胸はつぶれる思いだった。文子は受験勉強に励み、まだ校則で割礼を義務化していない進学校に進んだ。そこから当時はまだ願書提出時に割礼を受けた証明書の提出を求めていなかった国立大に進んだ。既に、ほとんどの企業が若手の女子社員に割礼を義務付けていたが、ごく一部の外資だけが例外であり、文子はそこに職を得ることができた。夫と出会い結婚したのはその直後だった。文子が割礼を受けていないことが分かると夫は親戚ばかりか両親からまで絶縁状態となってしまった。それでも理解ある夫は文子からは離れなかった。娘を妊娠し、産休をとろうと申し出た際、文子が会社から受けた通告は割礼を受けなければ退職せよとのことだった。すでに、割礼を受けていない女子を雇用する企業への風当たりが強くなっていたのである。文子は専業主婦になることにした。文子の両親は割礼に反対する団体の役員として仕事の合間を縫って精力的に活動するようになっていたが、もはや世間一般はそのような団体を性風俗を紊乱する輩としか見なくなってしまっていた。夫が突然の事故で死んだのは文子が臨月を間近にしたころだった。娘を腹に宿

して文子には悲しみにくれる余裕すらなかった。時を同じくして、公務員だった文子の父が僻地の第三セクターへ出向を命じられたのである。公私にわたって割礼に反対していたことが本当の理由なのは明らかだった。両親は文子に援助を申し出たが、実家の球状を知っている文子はとてもそれを受ける気にはならなかった。蓄えは出産費用などでたちまち底をつき、文子は一歳になったばかりの娘を託児所に預けて働きに出なければならなくなった。すでに割礼を受けていない女性は少数であり、受け入れる職場は風俗産業だけとなっていた。クリトリス完全なままで、性感がそのまま残っている女性は風俗産業にとっては貴重だった。風俗産業界にまでは世間の反性的な風潮は及んでいなかった。建前より、感じない女が相手ではつまらないという大多数の男の本音が支配的な業界だった。風俗嬢になる決心とともに文子は長かった髪をばっさりと切った。もともとの童顔とショートカットが相まって十代といっても通用するほどの可愛らしさに店でも指折りの人気となった。指名ナンバーワンとして風俗ガイドの雑誌に載ったこともある。それでも、次々と若い新人が参入してくる業界で長く生き残るのは至難の業だった。指名される頻度もめっきり減った今、文子は風俗に見切りをつけ、昼間の仕事に転じるのである。それはすなわち、文子が割礼を受けるということを意味していた。文子は明日、病院で割礼を受けることになっている。就職先から求められた割礼の内容は、麻酔無しでクリトリスの先端と小陰唇の全部を切除するというものだった。企業は文子を少女時代に受けるべき通過儀礼を受けてこなかった者と見なしているのだった。

「ママ、どうしたの？」

いつもと様子が違う母の顔を覗き込んだ娘が尋ねた。

「ああ、何でもないわ。」

文子は慌ててにこやかな顔を作り、明るく答えた。娘には明日から母は一泊の出張に出るから友達の家に泊まりに行くのだと言い含めてあった。娘を預かってくれるのは同じ風俗店で働いていた元の同

僚である。その同僚も文子と同じように割礼拒否をした者だったが、結局は割礼を受け、今は結婚して家庭に入っている。血のつながった肉親を当てにできない文子にとっては数少ない私生活のことを相談できる相手だった。
「明日ね、ママのお友達がお迎えに来るのはお昼ごろだから、お寝坊できるよ。今日は特別に夜更かししちゃおうか！」
文子はにっこりと笑って言った。意外な申し出に一瞬きょとんとした表情をした娘が、ソファーの上できゃっきゃとはしゃいだ。
「いい物を着せてあげるね。ちょっと待っててね。」
文子ははしゃいで飛び跳ねる娘を座らせると、二人の寝室になっている隣室に向かった。クローゼットの上からダンボールを下ろし、底の方から黄色いティーシャツを引っぱり出した。振り返るとドアの脇に娘が立っていた。文子はそのシャツを娘に向かって広げて見せた。
「はーと！」
娘が指差して言った。その通りで黄色いシャツの胸の部分に赤くハートが染め抜かれていた。かつて、割礼に反対する意見がまだ一定の影響力を保っていたころ、割礼を受けないという意思表示として少女たちが着た物だった。文子が中学生のころ、両親から受け取ったものだった。既にそのようなシャツを外で着て歩ける時代ではなくなっていたので袖を通す機会もあまり無いまましまいこまれていたのである。文子は娘にパジャマの上からそのシャツを被せた。まだ四歳の体には大きすぎたが娘はうれしそうに笑った。もちろん、娘はこのティーシャツがどういう意味を持つものか理解できない。
「はーと！」
自分で袖に腕を通した娘が胸に添え抜かれた赤いハートを突き出して言った。無邪気な娘の様子に文子の感情が沸き立って、傍らの娘をいきなり抱きしめた。この娘が年頃になったとき、割礼などという惨い仕打ちを受けずにすむ世界があることを文子は願った。突然のことにびっくりした娘だったが何事かを感じ取ったらしく、大人

しくじっと立ったままでいた。自分を抱きしめている母の目じりから涙が流れているのを娘は見ないですんだ。

翌朝、まだ娘が眠っているうちに起き出した文子は病院から処方されていた下剤を飲んだ。指示通りに朝食は抜いて、錠剤を水と一緒に飲み下すと、ものの数十秒で猛烈な便意に襲われた。諸々の事情で割礼を受ける前に便を一掃する必要があるのだ。日ごろ下剤など飲まないだけに強烈に効いたらしく、文子は慌ててトイレに駆け込んだ。娘を友人に預け、文子が病院へ向かったのはその日の昼過ぎである。

第三話後編（前書き）

女性性器切除（ＦＧＭ）にはいくつかの型があるが、いずれもその起源については何も記録が残っていないため不明である。しばしばイスラム教の教義によるものと誤解されているが、イスラム教の起源よりはるかに古いことは確かなようである。本編で「文子」は受けたものはクリトリスの全部または一部と小陰唇を切除するクリトデクトミーと呼ばれるものである。現実には止血に泥や卵、あるいは熱した油等が使われ感染症や出血で死にいたるケースも多いとされている。

文子はオペ室の隣にある部屋で手術台に横たわっていた。台にはキャスターがついているのでここでオペ前に必要な処置をするようだった。脚を開いたまま固定する器具がついた割礼用の手術台だったがまだ足は乗せられず、腰までしかない短い手術着でむき出しになた下半身には冷えないようにタオルがかけられていた。髪の短い頭には風呂場でかぶるようなきのこ状の帽子が被せられている。ここに来る途中、文子は車椅子に乗せられた中学生と思しき少女とすれ違った。手術着を着て、下半身をタオルで隠されていることからたった今、割礼を終えてきたばかりと分かった。かなり大掛かりな手術だったらしく、少女の額には玉の汗が浮かび、唇は青ざめていた。文子の滑らかな肌に鳥肌が立った。自費負担をしてでも個室をとって良かったと文子は思った。自分より年下の少女たちが同じ部屋で割礼の傷の痛みに苦しんでいるを見るのは耐えられなかった。

今朝飲んだ下剤のせいで文子は下腹部に力が入らなかった。割礼から一昼夜は細菌感染の心配もあって、大便はしないほうがいいのである。下剤をかけた上で絶食するのはそのためであった。もう出るものなど残っていない下腹部を手の平で温めながら文子はぼんやりと緑に塗られた天井と蛍光灯を眺めてた。この手術を受けなければ昼間の仕事には就けないのである。今や、どんな企業の面接係も割礼を受けていない女子社員など雇うわけにはいかないと考えているのだ。ついに一週間前にも文子はそのことを思い知らされた。

「文子さんでしたね。けっこうな経歴です。わが社として採用はいたします。ただし、割礼を受けていただきます。手元の冊子にある通り。」

髪をひっつめた中年女性はきびきびと事務的な口調で言った。割礼を要求されることは文子も予想して覚悟していたので驚きはしなか

った。冊子には確かに３５歳未満の女子社員は割礼証明書を提出することとあった。文子は頷いて了解した。ところが、冊子にはコピー紙が一枚挟んであり、冊子とは別の内容が記載されているのだった。

「これは？どういうことでしょう？」

文子は聞いた。面接係の中年女性が能面のような無表情な顔を上げて説明した。

「書いてある通りです。文子さんには特に、小陰唇の切除を麻酔無しで受けてもらいます。」

手術費を自己負担して麻酔をした上でクリトリスの一部切除で済ませようと考えていた文子は仰天した。抗議の声を上げようとした文子だったが面接係の声の方が早かった。

「当社はどこよりも貴方のキャリアを買っていますよ。大学の成績も優秀ですし。しかし、貴方の職歴が減点要因なのは自覚しておられますね。あっちの仕事をしてらっしゃったとなれば、普通の女性のアソコと比べてどうでしょう。いかがわしい仕事をしていた跡を体に残した社員など雇えません。小陰唇切除は受けてもらいます。」

文子は唖然とした。まさか当の女が性経験が多ければ小陰唇が肥大して大きくはみ出すなどという迷信を信じる時代になっていたとは思わなかった。抗議するどころか呆気にとられている文子に中年女性はさらに言った。面接係はやせた頬に薄い唇がいかにも冷酷そうで文子にトカゲを連想させた。

「いいですか、どういう事情があったにせよ、貴方は若いうちに受けるべき通過儀礼をまだ受けていないのです。やるべきことをやらずして社会に受け入れられようとするのは虫が良すぎます。今では小学生だって割礼を受ける時代です。子供でさえ麻酔無しで痛みに耐えてますよ。」

文子は抗議するのを諦めるしかなかった。この面接官の言うことが今の時代の社会通念なのである。理不尽だとは思っても口に出せば終わりだった。やっと面接に漕ぎ着けて、内定まで取り付けたこの

職を逃すわけにはいかなかった。文子には養わなければならない娘がいるのだ。面接を終えて部屋を出ようとする文子の後ろから面接係の声がかかった。

「文子さん、個人的なことを言いますとね。私の娘が今年から通う中学校は新入生全員に割礼がありますよ。アソコを全部切るんです。いいですね。キャリアを活かせるまっとうな仕事に就くには通過儀礼が必要なんですよ。」

押し付けがましい物言いに文子は怒りがこみ上げたが顔には出さずに一礼してドアを閉めた。あのような母親では災難だと顔も知らない面接係の娘に同情もした。部屋の外からはナースシューズで小走りに廊下を行く音が聞こえている。間もなく扉が開いて看護婦が二人入ってきた。二人とも緑色の手術着に頭かたすっりと覆われて、大きなマスクをしているので歳などは分からない。体つきから女と分かるだけである。

「はい、処置を始めますよ。文子さんですね。」

取り違え防止に必ず名前は確認するのである。声の様子から年配らしい看護婦の口調は事務的では合ったが冷酷な感じはしなかった。文子が頷くと下半身を隠していたタオルが取り払われ、明るい光の下に文子の白くて細い下半身が晒された。下半身に感じる室温の冷たさに文子はいよいよ酷い苦痛を受ける時が迫っているのだとさすがに緊張した。

「力を抜いていて下さいね。」

こっちはまだ若いらしい看護婦が言った。看護婦は文子の足を持ち上げると大きく広げた状態で太いベルトでしっかりと固定した。覚悟を決めてきたので文子はおびえつつも協力的だった。職歴が職歴だけに人前で性器を晒すのには多少なりとも慣れている。しかし、割礼を強いられている多くは思春期の少女たちである。自分の置かれている状況にも関わらず、つい他人の苦痛に胸を痛めてしまう文子であった。文子は自分の股間に生暖かいものが塗りつけられるのを感じて驚いて顔を上げた。

「あ！動かないでいてください。剃りますんで。」

文子の股間に泡を塗りつけていた若い方の看護婦が慌てて声を上げた。手術前に股間の毛を剃るとは知っていたので文子は再び姿勢を戻した。剃刀の刃がすべり体毛が剃り落とされるちくちくという感触を股間に感じながら文子は処置が終わるのを待った。看護婦は剃り残しが無いように肛門の周辺や大陰唇の裏まで指でなぞって確かめていた。文子の客の中には性器を剥き広げて観察するのを好む者は決して珍しくなかった。文子も客の要望に応えてこそリピーターをつかめるので部屋を明るくして気が済むまで観察させてやっていたのである。同性に性器を見られるというのはまた違って恥ずかしいものなのだと文子は思った。緊張の度合いが増してきた文子ではあったが頬には羞恥で朱がさしていた。子供がいる未亡人というイメージからは程遠いほど、文子の性器は初々しさを保っている。年齢相応に色素は沈着しているものの、小陰唇は僅かにはみ出すのみで、脚を大きく開いてもふっくらとした形のいい大陰唇がその下にある膣口な度の構造を隠していた。性体験が豊富であれば性器がグロテスクになるなど所詮は迷信なのである。看護婦が文子の股間を股間を洗浄し始めた。一人が文子の尻の下にボウルをあてがい、もう一人がチューブから勢いよく蒸留水を出して複雑な形状をした女性器を隅々まで洗った。洗浄終わると看護婦は文子の上半身を二人掛りで台にがっちりと固定した。麻酔なしの手術であるから暴れられると危険なのである。さらに、心電図のコードを手術着の襟から手を入れて装着し、細菌感染防止に大きな青い布で文子の上半身を頭だけ出してすっぽりと覆ってしまった。台の上で身動きができない文子の胸中を不安が満たした。誰かが股間に触れるのを感じて文子の白い内股がぴくりと痙攣した。股間を洗った水があらかた乾いたので大陰唇を剥き広げた状態でテープで固定したのである。看護婦二人は台のキャスターについたストッパーをはずし手術室に向けてゆっくり動かし始めた。文子はゆっくり動く天井を見ながら、いよいよなのだと下唇をかんだ。

むき出しにされた文子の股間を無影燈がこうこうと照らした。もとより白い文子の太股はが輝くようだった。文子の視界の外で医者が何か準備をしているらしく金属の触れ合う音が緊張で感覚が鋭敏になっている文子に聞こえた。
「はい、すぐに済みますから大丈夫ですよ。点滴を繋ぎますんでこれを握ってくださいね。」
先ほどの処置をした年配の看護婦が見せたのは手に乗るサイズのアザラシのぬいぐるみだった。この程度の心遣いでも今の文子にはありがたかった。看護婦はそのぬいぐるみを拘束されて手から先しか動かせない文子の右手に握らせ、浮かびあがった手の甲の欠陥に点滴の針をさした。左手の方には血圧計と心拍系を繋ぎ、心電図が正常に作動しているのを確認すると、看護婦は医者に準備完了の声をかけた。友人の伝手でこの病院を選んだ甲斐はあったと文子は思った。文子は多くの割礼を強いられる少女たちがもっと非人間的な扱いを受けていることを知っていた。これで十分ましな部類なのである。医者はピンセットで消毒薬を含んだガーゼをつまみ、文子の性器を拭い、最後に肛門の周りまで丁寧に消毒した。文子が股間を拭われる感触を感じるのと同時に看護婦はシリコンでできたマウスピースを文子に噛ませた。歯を食いしばって痛みに耐えるためのものである。
「うっ・・・！」
文子がうめいた。医者がピンセットで文子のクリトリスのうちで一番敏感な柔らかな先端を包皮の中から探り出してつまんだのである。思わず身をよじろうとした文子だったが体はがっちりと固定されて動かず、頭は看護がすかさず押さえつけた。
「うっ・・・、ううっ・・・。」
額に脂汗を浮かべて苦悶する文子に構わず、医者はクリトリスを引っ張った。鋭い痛みがどんどん酷くなり、もう耐えられないと文子が思った瞬間、細い鋏がクリトリスの先端を切り離したのだった。
「ぎゃあああああ！」

マウスピースを吐き出して文子は絶叫してしまった。全身の筋肉に力が入り、文子を拘束してるだいがぎしぎしときしんだ。
「血圧が260mmHgです。」
看護婦の声に医者は一時処置を中断した。先端を失ったクリトリスからは血がながれテープで剥き広げられている性器を赤く染めていた。
「配信呼吸してください。一番痛いところは済みましたよ。」
頭を押さえつけていた看護婦がいった。ぜえぜえと荒い息する文子の血圧がやや落ち着くのをまってから看護婦は再びマウスピースを噛ませた。ほんの数分の中断であったが猛烈な痛みに耐えている文子にとっては数時間にも感じる長さであった。医者は生理食塩水で文子の股間をに滴っている血液を流した。さっき切られたばかりの傷口には恐ろしく沁みて、文子の内股に薄い脂肪を通して筋肉の形が浮いた。大陰唇は剥き広げられた状態でテープで固定されているので、小陰唇は既に根元からむき出しになっている。医者は容赦なくその小陰唇をつまんだ。女性器の中では比較的鈍いと言われる小陰唇だが、金属の硬い器具でつままれればするどい痛みが走った。医者は強く小陰唇の引っ張って根元にメスを入れてそぎ落とし始めた。
「うう・・・。ううっ・・・。ひぃ・・・。」
文子はマウスピースを噛みしめて痛みに耐えた。それでも歯の隙間からはうめき声が漏れ、涙と鼻水で顔中が濡れてしまった。鼻が詰まって息をするために口を開けけば、嗚咽が漏れてしまった。酸欠を起こしたのか文子は意識が朦朧とし、医者や看護婦の話す声がいやに遠くに聞こえた。
「先生血圧が・・・。」
「いや、もうすぐ終わる。」
看護婦が血圧計を読み上げたが、医者は割礼の続行を決めた。既に文子の小陰唇の片側はそぎ落とされ、もう片側も半分までは切り離されてぶら下がった状態になっていた。最後のメスが入れられ小股

脹が左右とも完全に切除された。もう一度、生理食塩水で血が洗い流され、止血作用のある軟膏がべっとりと塗りつけられた。傷口を触られて文子はまたうめいた。
「はい、痛いことは終わりですよ。カテーテル入れますからね。力を抜いてください。」
頭の上で看護婦の声がして、痛みに耐えつつ文子はなんとか体から力を抜こうとした。しかし、強張った筋肉が意思に反して硬直したままだった。看護婦が文子の肩を優しくなでると、ようやく徐々に文子の筋肉が弛緩した。
「ひぃっ！」
尿道にじわっと熱い挿入感があり文子は思わずかすれた声を上げた。尿道をいじられた経験は数え切れないが、こうした挿入を受けるのは初めてだった。尿道を囲む神経はクリトリスの神経と近い。先端を切り落とされたクリトリスが火の様に熱く痛んだ。尿道にカテーテルが挿入されると、医者は大陰唇を固定していたテープをはがし、幹部にガーゼを当てて、紙おむつ状の物を文子に履かせた。これはもともと割礼用につくられたものである。オムツのようだが、またの部分は傷口から出る血を吸うため、整理用ナプキンのように厚くつくってある。そして尿道あたりにはカテーテルを通す穴が開いているのである。
「はい、頑張りましたね。終わりましたよ。」
看護婦の言った声が文子には遠くにかすんで聞こえた。
　文子は車椅子で病室に運ばれ二時間の絶対安静を命じられた。尿道に挿入されたカテーテルには袋がつながれ尿がたまり始めていた。鎮痛薬の錠剤が処方されそれを飲んだ文子は猛烈な睡魔に襲われていたが、内服薬くらいで股間の傷の痛みには大して効果はなく、眠りに入ることが出来ないでいた。入院は一泊だけである。今の文子には帰りを待ってくれている娘が唯一の慰めだった。口の中で小さくかみ殺してこの場にはいない娘におやすみを言うと文子の意識はようやく浅い眠りに落ちていった。

第四話前編（前書き）

とある女子高校生が電車に乗っていた。瀬の低い彼女がつり革につかまるとセーラー服の裾の腹側が持ち上がり、下のシャツが見えてしまった。そんな時、前の座席に座っていた男がいきなり裾の中に手を入れてくるという事件が起こってしまった。勇気ある女子高校生は男の腕を捕まえ、周囲の乗客の助けもあって犯人を鉄道警察に突き出したのだった。この事件を受けて、彼女の通う学校がまず最初にしたことは、なんと、つり革につかまってはならないと規則を作ることだったのである。

本編はフィクションである。しかし、このような馬鹿らしい事態は決して珍しくないのだ。

湯気がもうもうとこもった狭いユニットバスに体をきれいに洗い終えた真由子がいた。両親は既に入浴を終えて、寝室に引っ込んでいる。真由子は腰掛けていた椅子をどけて床にぺたりと尻をついて座りなおした。夏とはいえ濡れたポリマーの床は冷たかった。真由子は小さな鏡を床に立てかけて、その前で大きく足を開いた。湯気で曇っていた鏡に湯をかけてやると今年の春、中学生になったばかりの性器が映しだされた。明日にはメスを入れられる性器であった。真由子の通うのは地元の公立中学校であるが、校則の多さと厳しさでは地元で知らない者はいなかった。もともと、教師の立場が強く、校則も厳しい地域であったが、数年前に今の教頭が赴任してきて以来、その地元でも異様なほど生徒を統制するようになっていた。明日からの夏休みを前に真由子の中学校では新一年生全員に割礼が施されるのである。それも、クリトリスの全てと小陰唇をそぎ落とし、大陰唇を縫い合わせて癒着させるという割礼が事実上義務化されたこの時代でも凄まじい内容だった。真由子は明日の割礼に備えて、学校で受けた説明会での指示通りに陰毛を剃り落とすところだった。真由子は手のひらでボディーソープを泡立てて、股間になすりつけ、そっと剃刀を這わせた。やっと生え始めたばかりの薄くて細い陰毛は数回剃刀を当てるだけで簡単に剃り落とされてしまった。洗い桶で股間に湯をかけて剃り残しが無いかどうか指の腹でなぞって確認した。さらに真由子は鏡に向かって大陰唇を剥き広げてみた。集団で割礼を行うため、時間を節約するのに各自陰毛を剃ることになっていたが、剃りにくい部分は剃刀をあてなくて良いとされていた。うっかり傷をつけて化膿してしまうと完治するまでメスを入れられないからである。大陰唇の裏側は薄桃色で毛の類は生えてなかった。明日、他人に剃ってもらう必要は無いと真由子は少し安堵した。鏡

に映った性器は初々しいが、もちろん真由子自身に他人のものと比べてみた経験など無い。大陰唇の縁がほんのりと色素でくすんでいるのが真由子の気がかりだった。明日は他人にこの股間を見せるのである。他人より見苦しいのではないかと心配するのは思春期の少女としては無理も無いことだった。真由子はもう一度ゆっくりと湯船に体を沈ませた。だいぶぬるくなった湯に蛇口から熱い湯を足し、湯船の縁に頭を乗せて真由子は体から力を抜いた。小柄な真由子でも手足を伸ばせないほど湯船は小さい。それに今はあえて温まらなくとも、風邪を引く心配は無い夏場でもあった。それでも、明日からしばらく入浴できない真由子は風呂を楽しんでおきたかった。じんわりと汗が出る心地よさに浸りながらも、真由子の胸中からは明日の割礼の恐怖が去らないでいた。その精神状態が体調に反映して夕飯がまだ消化されず胃にそのまま残っている。寝不足で体調が悪ければ明日は余計に苦しむ羽目になるのだ。恐怖心は押し殺してでも今晩は良く眠っておかねばならなかった。

翌朝、学校は既に夏休みに入っていたが、半袖のセーラー服を着た真由子は重たいヘルメットをかぶり夏の日光に背中を照らされながら学校に向かって自転車をこいでいた。自転車の荷台にはなんと布団と枕が積んであった。割礼を受ける場所というのが病院ではなく学校なのである。今の教頭が赴任して最初にやったことは全女子生徒に割礼を義務付けることだった。割礼は必要との社会的コンセンサスはほぼ出来上がってはいてもさすがに極端と言うべきやり方だった。当然批判は起こり、一部のマスコミは病院にまでやってきた。隠し撮りされたらしく、割礼を終えて死んだように病院のベッドに横たわる女子生徒たちの写真が週刊誌に掲載された。学校名は伏字になってはいたが、これほどの惨い割礼を義務化する学校は他に無かった。しばらくの間は日に何本か職員室に抗議の電話がかかってくる日が続き、新教頭は大いに懲りたようだった。結局、翌年度から病院から派遣された医師が校内で割礼を行うことになったのだった。出血に備えて一晩は医師の看視がいるため、真由子たちは

今晩は体育館に泊まるのである。敷き布団と枕は清潔なものを自前で持って来いという指示が出ていた。真由子にとってはこれから割礼を受けに行くと看板を背負っているようなものであった。真由子としては人目の無い早朝に家を出るつもりが、割礼の痛みを想像すると恐怖寝付けず、だいぶ寝坊をしたのである。大通りの人目を避け、真由子は路地に入った。通学路を外れることは校則違反であり、見つかると面倒なのだが、今は恥ずかしさが先にだった。自転車一台がやっと通れる狭い路地に入ったところで真由子は道を選ぶのを間違ったと悔やんだ。前方から地元にあるサッカークラブのユニフォームを着た少年たちが数人歩いてきたのである。すれ違うにはいったん自転車を降りねばならなかった。

「あ・・、布団。これから割礼なんじゃん？お前んとこの姉貴は去年だったっけ？」

「うん、朝、もう学校辞めるとか泣いてさ。親父が無理やり連れてった。」

すれ違いざまに少年たちの会話を真由子ははっきりと聞いてしまった。真由子は羞恥で顔が熱くなった。自転車に跨ると真由子は全力でペダルをこいでその場から去った。

途中で自転車を飛ばしたため、学校につくころには真由子は既に汗だくだった。これから数日は入浴禁止だというのに思わず嘆息するしかなかった。集合と指定された時間までにはまだだいぶあったが、体育館にはほとんど全員が集まっていた。皆、人目を気にして朝早く家を出たのだった。真由子は自転車を置くと、着替えの詰まった通学鞄と布団を担いで体育館に向かった。前日の終業式の後で説明を受けていたので迷わずに自分の番号が書かれた紙が床に貼り付けられているのを見つけ、そこに荷物を下ろした。しかしゆっくりとはしていられない。真由子はさっそく布団を敷き、シーツや枕カバーを受け取ると今晩の寝床を整えにかかった。この学校で教師に目をつけられないためには忙しそうに動いているか、やることを全てやって静かに待機するかだった。病院が用意したシーツの消毒薬の

匂いがつんと真由子の鼻を突いた。体育館の隣の駐車場に大型車が何台も入ってくるエンジンの音がした。割礼に必要な機材一式と手術室を備えたトレーラーである。八台を動員しても六クラス分の女子の全てに割礼を施すには五時間はかかるのだった。

駐車場で割礼用のトレーラーを所定の位置につかせるように誘導しているのは、佐瀬という教師であった。長く伸ばした髪が低めの背をさらに低く見せている地味な印象の女である。佐瀬の顔立ちは整っていたが、表情に若い女性らしい溌剌と英気が無い。無気力に仕事をこなしているといった雰囲気だった。八台のトレーラーを所定の位置につけると、佐瀬は手提げ鞄のポケットから小さく切った紙の束をつかみ出した。紙には生徒の番号と名前、割礼を受けるトレーラーの番号が乱暴な字で書いてあった。今朝早くに松井という体育教師から押し付けられたもので、生徒が揃った頃合を見て配布せねばならなかった。医師によって技量に差があるために受ける苦痛を平等にするために松井が抽選で決めたとのことだった。今日が楽しみで寝付けず、夜なべでもして作ったのだろうかと佐瀬は思った。この割礼の日が近づくにつれ、松井が浮き立つように機嫌がいいのを佐瀬は知っていた。

（サディストめ・・・。）

佐瀬は胸のうちで罵りつつ顔には出さなかった。結婚するまでの腰掛のつもりでついた教職であった。職員室の人間関係にぜったいに波風を立てないのがここの流儀だと佐瀬も心得ていた。佐瀬とて女である。高校一年生のときに校則でクリトリスを切り落とす割礼は受けていた。そのときの自分より歳若い少女たちがもっと惨い仕打ちを受けていることに心が痛まないわけではない。しかし、佐瀬は生徒たちの苦痛は着任二年目の自分の責任ではないと割り切っている。遠からず退職する日まで指示される仕事を淡々とこなすことだけが佐瀬の日常だった。佐瀬は整えた布団の上に両膝を抱えて座っている生徒たちに割礼を受けるトレーラーの番号が書かれた紙を一人づつ配って回った。百人を超える人数に途中で佐瀬は面倒にな

りざっと見渡してほぼ欠員が無いことを確認すると、目の前の少女に紙の束を渡した。その少女は何も指示されなくとも紙の束から自分の名前が書かれたものを選んで抜き取ると、束を隣に渡した。少女たちは静かで私語どころか咳払いすら慎んでいるようだった。これから受ける苦痛を前に緊張しているのだったが理由はそれだけではなかった。ジャージにサンダルをつっかけた松井がこればかりは閲兵する将校のように胸をそらして、少女たちの間をゆっくり歩いているからだった。松井は安っぽいジャージでいながらなぜか有名ブランドのロゴが入ったスポーツバックを肩から提げている。野暮を通り越してしまったそのいでたちで松井は喜色満面だった。自分では難しい顔をしているつもりなのだろうと佐瀬は思った。松井は体育館の隅々にまで目を走らせていた。生徒に何か言いがかりをつけられる口実でもないものかと探しているのだった。一人の少女が寝不足であったのだろうか、抱えた両膝の間に顔を伏してだるそうにしているのを松井は見つけてしまった。

「姿勢が悪い！立て！」

さっそくその少女の前に仁王立ちになった松井が怒鳴った。いつものことで、他の生徒たちは運悪く夏井に目をつけられた被害者に同情しつつも自分に矛先が向かなかったことに安堵した。

「集団行動では常に気を張っていろ。いいか、学校は集団行動をするところだ！」

壁際に立たせた女子生徒を怒鳴りつけながら松井はおかっぱに切った髪をつかみ頭を揺さぶった。うなだれて叱られていた少女はそれでも無抵抗である。入学してから数ヶ月、松井に目をつけられたときの対処法は学んでいた。無抵抗で口答えをしないことだった。うつむいた生徒の頭に拳骨を喰らわせてようやく松井は気が済んだようだった。被害にあった生徒は元の位置に戻り背筋を伸ばして座りなおした。目じりに涙はたまっていたが拭うことはしなかった。泣くという行為は最も松井を刺激するのである。一部始終を佐瀬が見ていたが松井はまったく気にしていなかった。それどころか何か文

句があるかとでも言う様に佐瀬をじろりと睨み据えたのである。佐瀬は自分の表情につい非難がましい色が浮かんでいたことに気づき慌ててその場を去った。

夏休み中でも平日である限り学校チャイムは鳴る。何らかの部活動に必ず参加することになっているのでいつもならグランドに野球部などが練習する姿があるはずだが、今日だけは閑散としていた。真由子は手芸部だが文科系のクラブも夏休みの半分ほどは登校せねばならない。学校の周囲の除草などの奉仕作業をやらされるのであった。始業時間を告げるチャイムがなって体育館に詰めていた女子生徒たちが一斉に着替えを始めた。直前に問診と簡単な健康状態の診断があるので体操服に着替えておくようにとの指示があったのである。一斉に着替え始める生徒たちの髪型は皆同じである。肩より長い髪は禁止でうなじを出してはならず、耳は出し、前髪は眉にかかってはならないとあれば、同じようなお河童にする以外に無いからだった。真由子がセーラー服を脱ぐと野暮ったい大きなブラジャーが現れた。学校の購買で売っているものである。普通、年頃の少女なら恥ずかしい代物であるが周囲の生徒たちは皆同じものをつけている。この学校で中学生らしい服装を指導するというと、下着まで指定するという意味まで含むのである。襟の無い半そでの体操服を着て真由子はスカートを脱いだ。尻大きく覆う学校指定ショーツではこれから履かねばならないブルマからはみ出してしまう。真由子は他の生徒と同じようにしりにショーツを食い込ませ幅を狭めてからブルマを履いた。ブルマの前の部分からも下のショーツがはみ出しているのでこれも丁寧に中に押し込まねばならなかった。一時期、女子学生に不人気なブルマが廃れハーフパンツが主流になった時期はあった。しかし、割礼法が施行されて数年、リベラルで知られる一部を除いて中学や高校ではブルマを体操着として採用している。教師は太股を露出するのを恥ずかしがること自体が異性への関心が高すぎるせいであり、学生にあるまじきことだと言うのである。

真由子たちが着替えている間も松井は例のスポーツバックを抱えて

体育館を行ったり来たりと歩き回っていた。思春期の少女が男に下着姿を見られて恥ずかしくないわけが無いが、誰も抗議に声は上げなかった。女子生徒たちは松井の視線をなるべく無視して手早く着替え、脱いだものは丁寧にたたんで整頓しておくのだった。

　髪型まで同じ女子生徒の集団は遠目には同じマネキンの群れのようである。少女たちはお河童頭をゴムで縛り小さな尻尾状にしていた。うなじを出してはいけないことになっていたが、体育の時間だけは後ろで髪を縛るのだった。実は松井の個人的な趣味であることは公然の秘密だった。その少女たちが二列に並んで医師の診断を受けていた。真由子も今朝の体温や持病の有無を書いた問診表を持って列に並んでいた。入学早々に受けた健康診断で心電図に異常などが見られなければこのように集団で割礼を受けることになっていた。この日も夏風邪をこじらせた数人を除きほぼ全員が揃った。この日割礼を受け無ければ夏休みが終わってから一台だけ割礼用の器具を積んだトレーラーがやって来る日がある。しかし、その日は授業がある平日である。苦痛の叫び声は空調が無いために、窓を開けた教室まで聞こえると真由子は聞いていた。真由子でなくとも男子生徒も登校する日に割礼など受けたくは無かった。簡単な診断であるから列はたちまち列は短くなり真由子の番が回ってきた。医者は問診表を見て特に考慮しなければならない記載がないと確認すると、それを脇に控えている助手に渡した。医者と向かい合って座った真由子が体操服の前をたくし上げると、医者は聴診器を当てて呼吸音と心音を確認した。診断はそれだけである。真由子の問診表に判が押されて今日、割礼を受けることが確定した。冷房の無い体育館は蒸し暑く、半袖の体操着でも真由子の肌は汗でべたついていた。いよいよ割礼が差し迫ったのだと真由子の胸中は不安でざわめき、背中を濡らしている汗を冷たく感じた。真由子は丁寧に体操服のすそをブルマに中に押し込んでもとの布団の上に早足でもどって座った。松常にてきぱきと急ぎ、なおかつ待つのがこの学校の流儀だった。松井の目が光っているだろうと真由子は顔を動かさず目だけで周囲を

見回したがいつの間にか松井の姿は消えていた。扉の向こう側の駐車場では割礼の準備が進んでいるらしく人が忙しく動き回る気配があった。昨日からっ視迫った割礼の恐怖で、酷い心理的負担が続き真由子の胃は意思でも飲み込んだように強張っていた。指示通りに朝食はとらなかったが、僅かにとった昨日の夕食がそのまま残ったような胃もたれだった。

「はい！準備ができました。下だけ脱いで外に出てください！」

体育館の扉が開いて、中年女の助手が大声で告げた。命令や号令に従うことには徹底的に慣らせされている少女たちは静々とブルマとショーツを脱ぎ、丁寧にたたむと通学用に指定されている靴を手にとって体育館から出て行った。真由子は松井がどこかに消えてくれて助かったと思っていた。陰毛を剃った下半身を晒すのは下着を見られるどころの恥ずかしさではない。体育館に残っていたのは松井の持っていたスポーツバックだけであった。

外に出てみて真由子の目が点になった。他の少女たちにも動揺が広がっているのが良く分かった。駐車場に運動会で使うようなテントが張られそこに医師が横一列に並んでいるのである．真由子たちは陰毛が剃り残されていないかどうかの検査のあとに、浣腸をするとは聞いていた。傷が新しいうちは細菌感染を避けるため大便をしないほうが良いので、朝食を抜いて直前に浣腸で便を一掃するのだった。しかし、真夏の明るい太陽の下、屋外でやるとまでは予想してなかった。女子生徒の心痛などまったく考慮しない教頭以下の職員にしてみれば、どこでやろうとも同じことなのであえて説明しておく必要など無いという理屈なのだった。敷地内は立ち入り禁止となってはいても、学校をぐるりとめぐっている道路をたまに自転車が通ることはある。周囲には民家もあり仮にのぞきでもされれば真由子たちは無防備であった。女子生徒たちがどこかで覗いている男子でもいまいかとそわそわしていた。それでも、教師の目のあるところで集団行動の規律を乱すわけにはいかず、体操服の裾で裸の下半身を申し訳程度に隠しながら、割り振られたトレーラーの番号ご

とに列を作り少女たちは整然と並んだ。真由子のトレーラーは八番となっていた。並ぶ列は一番右側で担当する医師はどうやら若い男のようだった。
　駐車場に並んだ生徒のやや後ろに下がったところに佐瀬は立っていた。もう一人、女教師がやや離れたところに立ち同じように生徒の列を監視していた。去年は夏休み直前に家庭の事情で転向してきた女子生徒が土壇場で逃亡を図ったのである。あのような失態は二度と起こすわけにはいかなかった。佐瀬の視界の端に松井の姿が入った。例のスポーツバックを肩からかけて、生徒たちからは死角になる配電盤の陰に立っていた。松井の立場なら女子生徒が内心どんなに嫌がっていても斟酌する必要が無いのに何でのぞきの真似事などをするのかと佐瀬はいぶかしんだ。今の教頭が赴任してきたとき、職員会議で開口一発言い放ったことは、若者に過剰な自由は要らないということだった。少年少女には抑圧が必要であり、痛みや苦痛を伴う通過儀礼が必要なのだと力説したのである。かつて、凄惨な受験戦争があり家庭では家長の力が強かったころに比べれば以下に現代の若者が過剰な自由に晒されて堕落しているか繰り返し述べ、それに代わる抑圧を自分たち教師の手で与えねばならぬと締めくくったのである。しわ寄せをくうのは生徒なのだから佐瀬や他の教師は特に異論を唱えなかった。自分たちの利害に関わらない会議というのは往々にして声の一番大きな者の意向で決まることが多いのである。その日から、赴任してきたばかりの教頭が出張の多い校長以上の影響力で学校を牛耳ることになった。狂喜したのは松井であった。さっそく幇間のように教頭にへつらい今は教頭の番犬になっている。秩序好きの教頭にとって松井の素行は必ずしも好ましい限りではないが、生徒の不満を押さえ込むには適任であることは確かであるので大抵のことには目をつぶるのであった。列の最前列にいた生徒たちがほぼ同時に浣腸を施された。少女たちの集団に動揺が走ったが佐瀬たちが心配したような事態は起こらなかった。佐瀬が松井が立っていた方に目を移すと配電盤の上にスポーツバックが置き

去りにされ、裾の姿は無かった。いぶかしんだ佐瀬が目を凝らしてみるとスポーツバックのジッパーが僅かに開き中で何かが光っていた。佐瀬の表情が引きつった。

「すみません！ちょっと職員室までいってきます。」

隣の女教師に一言告げて佐瀬は松井を探しに駆けだした。スポーツバックの中身はビデオカメラと考えて間違いなかった。体育館の横に回ったところでやや冷静さを取り戻した佐瀬が思った。

（松井を探してどうしようというのだろう・・・。あの馬鹿が破滅するのは確かに気味が良い。それでも隠し撮りで告発でもしようものなら学校そのものが批判の矢面に立たされる。自分の立場を悪くしてまでやる義理はあるのだろうか・・・。）

馬鹿らしくなった佐瀬は走るのをやめた。結婚するまでのしばらくの間、平穏無事に務めたかった。せいぜい家事手伝いよりは元教師の方が結婚の条件で有利になると思って就いた仕事である。その佐瀬の前を松井が横切った。佐瀬に気づいた様子は無く、どうやら体育館の裏手から中に入るようだった。

第四話後編（前書き）

これをもって『割礼四景』は完結する。いわいる18禁でありながら当然あるべきセックスのシーンが一つもないという読者にはおそらく退屈を強いるか、好みが分かれるかのいずれかしかない代物に長々と付き合ってくれたことに感謝する。

じりじりと照りつける日光とアスファルトからの熱を浴びながら真由子たちは割礼前の処置を受けていた。全員が体操服の上だけを着て下半身はむき出しである。その上、足元は三つ折ソックスに通学用の革靴なのだから無様としか言いようが無い姿だった。真由子に順番が回ってきた。これからどうすべきか先に並んだ同級生を見ていた真由子には分かっていた。性器を検査するのに診察台のようなものは用意されていない。真由子はパイプ椅子に腰掛けた医者に一礼して、くるりと背を向けると、体操服の裾をたくし上げ、膝に手を置いて体を前に倒した。医者とはいえ男にむき出しの尻を突き出す格好になるのだった。医者の手が緊張で震えている膝をこじ開けようとして、真由子は硬直した。恥ずかしさと緊張で混乱している真由子は脚の開き方が足らないのだとすぐには気がつかなかった。ゴム手袋をした医者の手が真由子の大陰唇を引っ張って裏返した。初めて他人に性器を触られる恥ずかしさに真由子は下唇を噛んで耐えねばならなかった。涙ぐんだために鼻の奥がつんと酸っぱくなり真由子は小さく鼻をすすった。すぐ隣では先ほど浣腸をされた少女がおまる跨いで立っていた。少女は肛門にあてがわれた脱脂綿を自分で押さえながら全身を震わせていた。医者は剃りのこしの体毛が無いか何度か恥丘と大陰唇を撫で回し、最後に肛門の回りまで厳重に検査した。真由子の隣で必死に便意と戦っていた少女に助手の看護婦が出してよいと告げた。少女がしゃがむのと大きな音とともに茶色い液体が噴出すのは同時だった。真由子たちがいる駐車場には既に多数の少女たちが排泄した便の匂いが漂っていた。柔らかくふやけた便をおまるに落としている少女の頬が涙で濡れているのを見て真由子はいたたまれずに視線を地面に戻した。突然、肛門に固く小さなものが挿入され真由子の小さな背中がびくりと痙攣した。真

由子が浣腸器の先端だと気がついた瞬間にグリセリンを含んだ冷たい浣腸液が情容赦なく注入された。
　佐瀬は松井が開けっぱなしにしたドアからそっと中を覗いてみた。誰もいないと思い込んでいるので松井はまったく周囲を警戒していなかった。松井は佐瀬からほんの数メートルのところで生徒がたたんで置いて行った衣類の中を探り始めた。次の行動に佐瀬はさすがに仰天して声を上げそうになった。財布でも置き引きしようとしているのかと思っていたところ、松井が引っ張り出したのは生徒のショーツだった。松井はそれを裏返してクロッチの染みに鼻を当てたのだった。暫くクロッチの香りを嗅いで何度か舌を伸ばして舐めると松井はそれを丁寧にたたんでそっと元の位置に返した。証拠隠滅というには稚拙な手口だったが、戻ってきた生徒が多少は不審に思ってもこれでまず申し出ることはない。佐瀬が見ているとはまったく思っていない松井は堂々と次を物色し始めた。生徒全員が浣腸を終えて戻ってくるまでにはたっぷりと時間があった。浣腸が終わった生徒は体育館に戻しても問題無いはずのところをわざわざ全員が終わるまで暑い駐車場のアスファルトの上で待たせることにしたのは松井だった。松井は迷った様子もなく次に物色するものを決めた。佐瀬は今朝渡された紙の束を思い出してはっとした。生徒たちの荷物と一緒に割礼を受けるトレーラーの番号と順番が指名と並んで書かれた紙が置かれている。その紙を見れば誰が残した衣類なのかは一目瞭然なのだった。佐瀬はどうして松井がわざわざそんな手間のかかるまねをしたのかようやく納得できたのだった。自分好みの美少女が八番のトレーラーに集まるように細工したに違いなかった。他に七台は一列に寄せて駐車されているが駐車場の広さの関係で八番だけは少しはなれた場所に向きを変えて停められていて盗撮用のカメラなどを安全に仕掛けるにはもってこいだった。そうなると、あの八番のトレーラーを担当する若い医者も松井と裏で繋がっていると考えねばならなかった。おぞましいものを見てしまったと後悔した佐瀬は足音を消してそっとその場を離れた。ずっと教師を続け

る気はなかったが、当面は松井の所業を見なかったことにせねばならなかった。嫌悪感を隠して表面上は笑顔つくり、毎日松井と顔をあわせねばならないかと思うと佐瀬は気分が沈むばかりだった。

　夏の太陽が照りつける駐車場では真由子が地面におかれたおまるを跨いで便意に耐えていた。次々に少女たちが浣腸を受けるのでおまるは一つでは足りず、真由子の隣ではもう一人の少女がしゃがんで苦しげに息んでいた。時折その少女の肛門から湿った音とともに軟便が短く噴射される。人間の腸は長いので大量の浣腸液を一度に排泄するのは不可能なのである。時間がかかってでも最後まで出し切らないと後で厄介なことになりかねないのだった。真由子が跨いでたっているおまるには前に少女が残した排泄物とトイレットペーパーがそのまま残っていた。一人づつおまるを換えていては人手がかかりすぎるのだった。羞恥ですすり泣く女子生徒たちの声と漂う排泄物の臭いで一帯は異様な雰囲気に包まれていた。肛門に押し当てた脱脂綿を自分で押さえて便意と闘っていた真由子に看護婦が出してよいと告げた。真由子が脱脂綿をおまるに捨て、しゃがもうとすると生まれたての子馬のように震えていた膝はかくんと折れた。真由子は危うくおまるの上に尻餅をつくところだった。すげに限界に達していた真由子の括約筋が緩み茶色い液体が行き酔いよく噴出し、いったんそれが止まると今度は柔らかくふやけた便が流れ出た。思った以上に大きい自分の排泄する音に真由子の顔面は耳まで赤く染まった。他の同級生たちが排泄する音やすすり泣く声を聞きながら、真由子は一刻も早く苦しい便意から逃れたい一心で息んだ。大きく息を吸い込んでうんと息張ると、音とともに少量の便が噴出されるのだった。他人の大便の匂いが漂う中で大きく息をするのは真由子にとっても気味のいいものではなかったが、猛烈な下腹部の痛みを前にしてはそんなこも頓着していられなかった。ようやく下腹部の不穏な痛みが治まり、もう出すべき便も無いという状態になった真由子が肛門とその周囲を丁寧にトイレトペーパーで拭っておまるを空けると待っていた次の生徒がすぐに入れ替わってしゃがんだ。

真由子が出したばかりの便の上に茶色い液体が噴射された。真由子は腹の中のものを出し切るのに手間取り予定以上の時間を食ってしまったようだった。割礼前の診断と処置を終えた真由子に助手の看護婦がパイプ椅子を指差して片足を乗せるように指示した言われた通りにすると看護婦は片足立ちのまま真由子に脚を開かせ、自分はしゃがんで下から股間を見上げた。看護婦は指頭大のタコの頭のようなシリコンの吸盤を取り出し、真由子のクリトリスに吸い付かせた。その吸引力は意外に強く痛みを伴い、性器への刺激に慣れていない真由子は思わず顔をしかめた。割礼前にクリトリスを強制的に勃起させる処置だった。真由子はクリトリスを強く吸引される痛みに内股になりながらもテントから出て太陽が照り付ける駐車場に整列して次の指示を待つ処置を終えた同級生たちに加わった。テントではまだ診断と浣腸が続いていて便の匂いは真由子たちのところにまで届いていた。真夏の太陽がじりじりと照りつけるアスファルトの上だったが、浣腸で体温を奪われている真由子にとってはかえってありがたい暑さだった。体温が戻るとともに強張っていた下腹部が弛緩して、全身に立っていた鳥肌も治まった。

佐瀬が駐車場に戻ると大方の生徒は既に浣腸を終えて駐車場に整列させられていた。漂ってくる排泄物の匂いに辟易しながら佐瀬は列の一番外側に並ぶ、八番のトレーラーで割礼を受ける少女たちを観察してみた。同じ髪型で服装まで同じとなると一見しただけでは皆同じに見えてしまうこの学校の生徒だが、松井が好みそうな色白で素朴そうな少女が集められていた。全ての生徒が浣腸を終えると一人づつペットボトルに入った水が配られて体育館に戻るように指示が出された。これからトレーラーの中の準備ができ次第、一人づつ呼ばれて割礼を受けるのだった。大便を出さないために禁食して浣腸まで施しても水分補給はせねばならなかった。小水は無菌であるしカテーテルを挿入するのでさほどの問題にはならないのだった。生徒と入れ替わるように松井が現れてカメラを隠した例のスポーツバックを回収すると、佐瀬が思っていた通り八番のトレーラーに向

かって行った。これから二年もたたないうちに唯一の趣味のギャンブルで負けが続いた松井が自分が所蔵していた盗撮のコレクションをネット市場に流すのだった。松井とその周囲の一部のマニアだけで流通していたものが一般に出回り反響は大きかった。松井の元に大金が転がり込むことになったが警察も捜査に乗り出すことになる。そのころには既に見合いで縁談ができていた佐瀬は保身のためにとっておいたカードを切った。松井の犯行をマスコミと警察双方にリークしたのだった。強制捜査を受けた松井宅から標本にされた少女の性器までが発見されることになった。松井に協力した医師も逮捕され、教頭とあおりを受けた校長までが辞職の上に退職金の返還を求められていたころ、佐瀬は勇気ある内部告発者として堂々と辞表を提出し教職を捨てた。松井が流出させた映像はファイル交換ソフトの利用者の間にまで拡散した。泣き叫ぶ少女の映像は世間の感情を刺激せずには済まず、学校の管理教育に対する風当たりは強まることになった。何らかの対応を迫られた学校が示した妥協案は次年度から割礼は本人の希望があった場合のみ行うということだった。もっとも、割礼の拒否を申し出る生徒はついに現れなかった。教師からの有形無形の圧力があり進学や学校生活で不利益をこうむる覚悟が必要だったからである。変化といえば毎年数名が割礼を逃れるために形式的に住民票を移し、別の学区の学校に通わせる親が出るようになっただけだった。

人が見ている前で、しかも屋外で浣腸をされて排泄するという思春期の少女には耐え難い恥辱を味わってから二時間ほどたって真由子はトイレで小水をはたいてからトレーラーに来るように指示された。トレーラーの中には割礼を行うために脚を開いた状態で体を拘束できる台と器具がそろえられていた。感染症の問題があるので私物は持ち込めない。真由子が身につけているものといえば頭髪を落とさないために耳まですっぽり覆った帽子だけだった。髪の長い女性が風呂場で使うようなビニル製のきのこのような物である。手術着さえ与えられない真由子は全裸で若い男の医者の前に立たされて

いた。先に割礼を受けた同級生たちのすさまじい悲鳴を真由子は散々聞いてしまった後だった。学校の近くには民家もあり、おそらく泣き叫ぶ少女の声を住人や通行人は聞いているはずだった。看護婦がものも言わずに真由子の股間に手も差し込んだ。

「きゃ！」

同性とはいえいきなりのことに真由子は仰天して声を上げてしまった。看護婦は真由子のクリトリスに装着されていた吸盤を回収したのだった。既に二時間以上も強く吸引されていた真由子のクリトリスは充血ししびれていた。この吸盤でクリトリスを勃起させた状態にしたとして恐怖と緊張でそれは直ぐに萎んでしまう。価格はただ同然であるだけで時間のかかる割礼にはあまり意味のない装置であった。それでもこの吸盤に拘泥する関係者が多いのはクリトリスを切られるときの痛みが増すからであった。割礼を通過儀礼と考えるなら痛みこそ最も重要な要素なのである。本人確認の質問に答える真由子は両手で胸と下腹部を隠して俯いていた。顔は既に耳まで羞恥で真っ赤になっていた。医者に台に乗るように指示された真由子は素直に従ったが緊張と羞恥で脚を開くことまではできなかった。傍らにいた看護婦はこれも想定内の事態といった態度で真由子の足をぐいっと開くとふくらはぎを受ける台に素早く固定し、ついで上半身も太いベルトでしっかりと固定してしまった。心電図や心拍系は備えられているが使われることはなかった。本来はある一定以上の時間がかかる割礼では使用が義務付けられていて公費からその予算も出ているのだが、こうした予算節減で病院が利益を上げ、生徒に割礼を受けさせる医療機関を選定する学校関係者の謝礼に当てることは暗黙の了解になってしまっていた。いずれにせよ、しわ寄せで手術着さえ節約されて非人間的に扱われるのは生徒たちなのである。割礼の台はベットというよりは椅子に近かった。医者と目線が同じ高さになりつい真由子は顔をそむけてしまった。医者が床のスイッチを踏むと台が静かに競りあがり椅子に座った医者の胸の高さ辺りに真由子の股間が位置するようになった。もちろん台は床にし

っかり固定されていて人間の力ではびくともしないのだがなんとなく安定の悪い姿勢で縛り付けられている真由子の不安は増した。真由子の股間の上で無影灯がまぶしい光を発して真由子の初々しい性器を照らした。真由子は知る由もないがこの無影灯の支柱には小型カメラが仕込まれて真由子の股間を捉えていた。松井に協力して医者が仕掛けたものである。医者の背後の棚が少し開きその中には松井がスポーツバックに入れていたカメラが入り、真由子の全身と表情を撮影していた。これから待つ苦痛におびえる真由子の心痛に構わず医者は消毒薬を含んだガーゼで真由子の股間を拭った。蒸留水で股間を流すとその水は真由子の尻を伝って下のボウルに落ちて溜まった。

「はい、力を抜いて。ちょっと痛いけど息むとよけい痛いよ。」

医者が尿道に挿入するカテーテルを見せて言った。真由子は震えながら大きく息を吐いた。ずきっとする痛みとともに尿道に管が挿入された。尿道に挿入するなら一般的に鎮痛成分が入ったゼリーを使用するが、真由子に使われてたのは単なる潤滑成分だけのゼリーだった。要は生徒の苦痛より安いことの方が重要なのである。息むなといわれても酷い痛みに真由子の体は硬直し、それが尿道の抵抗となってかえって苦痛を増していた。その抵抗に構わず医者はカテーテルは最後まで押し込んだ。

「ハァハァ・・・・。」

尿道に異物を挿入される苦痛から開放されて安堵した真由子はようやく筋肉を弛緩させ荒い息をした。しかし、本当の苦痛はこれからだった。医者が何の前触れもなくいきなり大陰唇をピンセットでつまんだ。

「ひぃ！」

鋭い痛みに真由子はかすれた悲鳴をあげた。すかさず看護婦がガーセとたたんだものを真由子に噛ませた。これを噛んで最後まで耐えろということだった。医者は裏返した真由子の大陰唇の裏側をそぎ落とすようにメスを入れた。

「うぐううっ！ふぐぅ・・・・・・！」

生まれてこの方感じたことのない痛みに真由子はガーゼをかみ締めてうめいた。既に全身が汗に濡れて台を汗などで汚さないように背中や尻の下に敷かれた布も濡れていた。大陰唇の内側が削ぎ終わると今度は小陰唇根元の粘膜ごとそぎ落としにかかる。やっと片側の粘膜がそぎ落とされ一部がクリトリスの包皮と繋がってぶら下がっている状態になったとき、とうとう真由子はかまされたガーゼを落として泣き出してしまった。

「うう・・・。おかあさん・・。いたいよお。」

真由子の泣く声など聞こえないというように医者は容赦なくもう片方の粘膜をそぎ落としにかかった。

「いたーい！いたい！もうやだ！たすけて・・・いたいよお・・・。」

真由子は泣いた。無駄と分かっていても暴れて逃げようとしたがしっかりと固定された体はまったく動かず、台がきしむことさえなかった。割礼の手順は医者の裁量に任されているがこの若い医者がクリトリスの切除を最後に回したのは一番痛みが酷いからだった。撮影している映像の出来を意識してのことだった。真由子の性器はクリトリスの両側に剥ぎ取られた粘膜と小陰唇が羽のようにぶら下がる状態となった。医者は切除する部分を一つのパーツとして繋がったままにするつもりらしかった。

「うっ・・・。痛い！嫌だ！そこだけはやめて！いやだぁ！」

ピンセットでクリトリスを包皮ごとつまんで引っ張られ真由子は次に何が起こるかわかった。鼻水と涙で濡れた顔を振って必死に訴えたが当然のことながら医者も看護婦もまるで聞こえないといった態度しか示さなかった。ついにクリトリスの周囲にメスが入り、さらにピンセットで引っ張られた。クリトリスの根に当たる神経の束といってもいい部分が引っ張りだ荒れて露出した。

「ぎゃあああ！！」

真由子は天井を向いて絶叫した。もう真由子にはこの苦痛が早く去

ってくれるように願うことしか考えられなかった。しかし、松井と示し合わせて盗撮している医者の方は残酷だった。よりによってこの時点で生理食塩水で真由子の股間を洗ったのである。大量の血液で作業がしにくい場合は確かにそのように洗うのだがこの場合は必ずしも必要とはいえない処置だった。真由子が被せられている頭髪を落とさないための帽子に通気性がない。かいた汗が乾かず、帽子の中でぐっしょりと髪の毛をぬらしてた。

「ぎゃあ！いたい！やめてぇええ！！」

細いノズルから噴射される食塩水は粘膜をそぎ落とされた股間には劇薬のように感じた。血で染まった水は真由子の小さな尻を伝いその下のボウルに落ちた。再び医者はピンセットでクリトリスを引っ張り今度は容赦なくメスで切断した。

「ぎゃあああああああ！！」

真由子の絶叫と同時に切除は完了した。クリトリスから小陰唇、大陰唇の内側までが一つになった真由子の性器が松井宅から標本となって発見されるのはこれから少し後のことになる。今度は必要な処置としてもう一度股間が生理食塩水で洗浄されれま、また真由子が怪鳥のような叫ぶをあげた。最後の仕上げとして両側の大陰唇を縫い合わせねばならなかった。

「ひぃ！いたい！もうやめて！いたい・・・・。」

針が貫通して糸が引かれるたびに真由子が死にそうな声で泣いた。トレーラーの中は細菌感染を恐れて寒いほどに室温を下げてあるのだが、真由子の額は苦痛のためにびっしり汗が浮いて光っていた。経穴と尿が通る穴を残して大陰唇を縫い合わせるのだからそれなりに時間はかかった。延々と続く苦痛に真由子はただ耐えるしかなかった。クリトリスに次いで敏感な大陰唇の縁を針で何度も刺される地獄のような苦痛もようやく終わった。これから二週間後に抜糸したとき真由子の性器は膣口と尿道口だけあり大陰唇がめくれることもないシンプルなものになっているはずだった。抜糸した後に両側の大陰唇が癒着して膣口がふさがってしまう場合がある。その場合、

残酷なことに膣の成長不良による難産などを防止するためこれも麻酔無しで大陰唇を切り離すのだった。息も絶え絶えになった真由子の股間に整理用ナプキンのようなものがあてがわれテープでとめられた。これが普通の整理用ナプキンと違うのはカテーテルを通す穴が開いていることであった。尿意をもよおしたら便器に跨ってカテーテルの先端にある蓋を開いて尿を捨てるのである。出血を抑えるために絶対安静の真由子は担架で体育館の自分で持ってきた布団の上まで運ばれた。指一本動かす気力も残っていない真由子は割礼を受ける同級生の悲鳴が聞こえてきてももはや感情は動かす、死んだように横たわるだけだった。

その晩は地獄だった。空調のない体育館は蒸し風呂のようで容赦なく蚊が浸入してきた。断続的に聞こえる少女たちのうめき声と医薬品や汗の臭いで激戦地の野戦病院ほどのすさまじい様相を呈した。唯一処方されて飲んだ鎮痛剤が合わなかったのか真由子は酷い吐き気に襲われとうとう看護婦に助けを呼んだ。一時間もしてから現れた看護婦が差し出す洗面器に真由子は吐いた。隣に寝ているクラスメイトを気遣って場所を変える余裕すらなかったのである。吐いたものの中に前日の夕飯に食べたものがほとんど消化もされずにそのまま残っていた。空がようやく白むころ苦痛に耐えることにさえ疲れきったように真由子は浅く短い眠りに落ちた。

翌朝、起床の号令で目を覚ました真由子たちの間を看護婦や助手の医師が回って股間にあてたものの交換をした。この日の晩からは自分で股間の消毒などもやらねばならないのだから、看護婦のやることをよく見ておかねばならなかった。真由子のところに回ってきたのはまだ歳の若い看護婦だった。看護婦は真由子の股間に張られたテープをそっと剥がし、尿瓶を取り出すとカテーテルの先端の蓋を開いた。真由子の意思とは関係なく濃い色をした尿が尿瓶に溜まっていった。真由子は顔から火が出る思いだったが看護婦の態度は人間的で真由子を安堵させた。消毒薬で股間を拭われて痛みが走り真由子が顔をしかめると看護婦は気遣わしげに真由子を見た。散々、

惨い扱いを受けたあとだけにこの程度の親切が真由子には涙が出るほどうれしかった。
「あの・・・。看護婦さん。あの・・アソコがどうなってるか見ていいですか？」
当然だが自分の股間は正面から見ることはできない。自分の体がどう処置されたのか不安になるのは当然だったし、よく見てみたいと思うのも当然の感情だった。人のよさそうな看護婦だったので真由子は思い切って言ってみたのである。看護婦は真由子の不安を察してくれたらしく小さな手鏡を渡してくれた。ナースキャップがずれていないかなど常に気に賭けねばならない看護婦は手鏡の類は持ち歩くのが普通である。真由子は渡された手鏡を開いた脚の間にそっと差し入れてみた。
「いやあああああ！」
叫び声をあげて手鏡を取り落とした真由子は両手で顔を覆って泣き出してしまった。真由子の股間は腫れあがり、糸で縫われた周囲はどす黒く変色していたのだった。手鏡を渡したのは失敗だったと思ったのか看護婦は慌てて真由子を慰めた。腫れは早晩引くし、抜糸してしばらくすれば黒ずんだ部分も元に戻るのだったが真由子にそれを聞く余裕はなくひたすら泣きじゃくるばかりだった。